
優衣

勝田圭

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

優衣

【Nコード】

N8041X

【作者名】

勝田圭

【あらすじ】

篠原優衣は、なでしこリーグで活躍する、非常に気の弱い高校二年生。最近、家族のことで悩みを抱えていて、試合にも練習にも集中出来ない状態が続いている。ある日、落雷に合ってしまった。近くで同じように落雷に合ったJリーガーの松島祐司の魂が、優衣の肉体に入り込んでしまう。優衣の魂は行方が知れず。松島の肉体はそのまま死んでしまう。優衣として生きるしかなかった松島は……

第一章 勇気、ください

1

がつ、と音が聞こえてきそうなほどに、身体と身体が激しくぶつかり合った。

合った、というよりは、一方的な体当たりといったほうが適切であろつか。

ぬまおたえこ

沼尾妙子は、ほっそりとした見た目ながらも体幹のしつかりとした、身体バランスの非常に高い選手である。が、まるでアメフトのような破壊的な突進を無防備な背中に受けては如何ともしがたく、弾けるようにふっ飛ぶと、大雨でぬかるんだピッチの中を滑り、転がった。

「おい、ファールじゃねえのかそれ！」

ベンチの笹本義夫監督は、思わず立ち上がると怒気を込めて叫んだが、豪雨のカーテンの向こうにいる主審には、まったく届いていないかも知れない。

納得いかないにもほどがある。

取られたボールを取り戻そうと完全にアフターで背後から突っこんで、肩をぶつけて転ばせておいて、イエローカードが出るところかファールにすらならないなんて。

「だから女子審判はレベル低いつてんだよ」

舌打ちした。

えのきとあけみ

隣にいる榎戸朱美コーチが、一瞬、監督に視線を向けた。

笹本は、ごまかすように咳払いをした。

もちろん女性だから能力が低いわけではない。そんなこと笹本も分かっている。あくまで確率論という数学的な問題、審判をやってくれる女性数の分母の絶対的な少なさや、育成システム等の問題を考えると、優秀な女性審判がうようよと出てくるわけがないのだ。男子にしたって、プロリーグが始まって二十年以上も経つのには、こ

れは優秀と文句なしにいえる審判が一人もないことを考えると、仕方のないことである。

その能力の低さでこちらも得することも多いが、しかし今日の審判のように、こつも基準が曖昧だと、ただゲームが荒れてしまうだけだ。偏向ジャッジじゃないだけまだましともいえるが、偏向なら偏向で、そう分かっていいるならやりようがあるというものだ。

先ほなど、特に酷かった。こつちの選手が触れたか触れていないかの、どう考えても相手のスリップとしか思えない転倒に対してこちらにイエローカードが出たし、それに抗議したキャプテンにもカードが出た。変じゃジャッジしてるからそりや被害を受けた側の選手から抗議だつて受けるだろうに、まあすっかり頭に血が上つちまってカード乱発、生理なんじゃねえのか？

さて、泥溜まりに突き飛ばされて滑つて転がった沼尾妙子であるが、すぐに起き上がると、自分を倒した相手である八番の背中を追つた。

だが、その背中中は既に遙か向こうにあった。

八番、深沢美樹ふかざわ みきはドリブルしながらサイドへと流れて、ボール目掛けてスライディングをしてきたS Bの仙田チ力をひよいとジャンプしてかわすと、そのまま突き進み、ゴール前の状況を確認しながら余裕を持つてクロスを上げた。

ファーに飛び込んだF Wの選手が、跳躍し、クロスに頭で合わせようとするが、間一髪まひまひといって差し支えないほどのほんのわずかの差で、G Kの堂島秀美どうじま ひでみが飛び出して、両手でボールをキャッチした。堂島は倒れながらも、ボールをがっちり自身の胸に抱え込んだ。「危なかった。つつかそもそもさっきのファールとつてれば、このピンチもなかったんだよ」

腕に顎にと、熊のように毛むくじやらで野生的な外見の笹本監督であるが、しかしまだぶつぶつと先ほどの件の文句をいつている。「優衣ゆい、そろそろ出るぞ。準備しとけ」

笹本は後ろを振り向いた。

「はい」

優衣、と監督に呼ばれたのは、まだ高校生くらいの少女であった。ふわっとした細く軽そうな髪の毛が、肩までかかっている。あどけないところの多分に残る、可愛らしい顔立ちだ。しかし、同じ年頃の少女と比べるとなんだか表情はおとなしく、覇氣にかけているような印象を見る者に与えた。

少女、篠原優衣はベンチから立ち上がると、ジャージを脱いだ。オレンジ色のユニフォーム姿になると、ゆっくりとアップを開始した。

ベンチを覆う透明な屋根の下から出た途端、叩き付けるように降り注ぐ大粒の雨であつという間に髪の毛がべっちゃりと頭皮に張り付いてしまった。

二〇一四年 六月二十二日 日曜日

日本女子サッカーリーグ 第十節

イレブンターキー北海道 対 石巻ベイスパロウ

会場 カナエ製粉スタジアム（北海道室蘭市）

一般人には日本女子サッカーリーグという名称よりも、なでしこリーグという俗称のほうが知られているであろうか。現在、その試合中である。

筋肉をほぐし、暖めた終えた優衣は、改めて監督から戦術上の指示を受けると、強く背中を叩かれ、ピッチへと向り出された。

もう、既にピッチにいる選手たちと同じくらいに、優衣の頭も服もずぶ濡れになっている。まるでバケツの水を何杯も頭から浴びたかようだ。

優衣の着ているのは上下オレンジ色、石巻ベイスパロウのユニフォームである。

なお対戦相手であるイレブンターキー北海道のユニフォームは赤と黒の縦縞シャツに黒いパンツだ。

主審に交替が認められ、ベースパロウのボランチである寺田なえが小走りに向かってくる。

「任せたよっ！」

寺田なえは、優衣の華奢な身体に抱き着くと、ぽんぽんと軽く背中を叩いた。

「はい」

優衣は雨に消え入りそうな小さな声で返事をする、ピッチへとそのままボランチとして入った。

普段このチームではほとんど右SHをやっているのだが、去年のU16代表ではずっとボランチであつたし、慣れという意味では全く問題ない。

どんどんどんと、とゴール裏からの低い太鼓の音が空気を震わせ、そして、それに合わせて、サポーターたちによる優衣のコールたち、といつても雀の涙ほどで、ピッチ上に立つ選手たちよりも少ない。みんな、選手たち同様にずぶ濡れだ。

いつもホーム試合ですら数十人だし、アウエーにしては来ている方だ。

ちなみに、であるが、全員が三十代四十代と思われる男性で、小太り率と眼鏡率が異様に高し。

今日は朝からずっと激しい雨が降り続けているのであるが、優衣がピッチに入ったのと同時に、突然、その激しさが増した。まるで滝のような、それは凄まじい雨になった。

なでしこリーグの試合は、その大半が日曜日の昼間に行われる。例えば真夏であろうともだ。ナイターは照明に金がかかるし、選手たちのほとんどがアマチュアで、翌日には仕事があるためだ。

今日もそんな普段通りのデーゲームだというのに、分厚い雲に陽光のほとんどを遮断されていて、非常に薄暗い。プロ興行ならば迷うことなく照明をつけているところであろう。

雨が地に跳ねて、もうもうと地面に湯気が上がっている。

それほどの雨に、しっかり注意をしていないと、ハイボールも、

すぐ近くのグラウンダーのボールも、とにかく見失ってしまっただ。

入ったばかりの優衣であるが、早速、イレブンターキー北海道Dの大きくクリアしたボールが、自分の方へと飛んできた。

素早く落下地点へと走り込んだところで、イレブンターキー北海道の九番、FWの成宮桂子^{なるみやけいこ}に背中を突き飛ばされた。

優衣は身体の強い方ではない、いや、どちらかというまでもなく弱い方であるが、この視界の悪い中、相手が審判の目を盗んで激しく押してくるであろうことはこの試合をずっとベンチから見ていて予想出来ていた。片足を前に出してぐつと踏ん張ると、すぐに背を伸ばして胸でボールをトラップ、すつと落として足元におさめた。この試合のファーストタッチだ。

成宮桂子が槍のように足を突き出してきたが、優衣は華奢な身体をむしる武器として、風になびくかのようにふわりとかわすと、豪雨の中をドリブルで突き進んだ。

篠原優衣はまだ十六歳、高校二年生だ。

ほとんどが成人ばかりというなでしこリーグのチームにおいて、女子高生ながらも主力としてプレーしている。

先天的な体質の問題なのか、成人どころかその年代の一般的な女子選手と比べてさえ、相当に身体つきが貧弱な優衣であるが、ボールを扱う技術の高さや視野の広さ、身の軽さや戦術理解度の高さという武器があり、これまで世代別代表の常連であった。

二年ほど前、十四歳でU16に選ばれた優衣は、米国遠征で、なんとボランチながらも強豪米国相手にハットトリックを達成、メデアには天才少女出現などと騒がれたものである。

しかし完璧な人間などいないもので、欠点としてはとにかく気が小さいこと。それが代表監督たちの気に入らなかったのか、単に実力が足りないだけか、それともそのフィジカルの問題であるのか、とにかくこの一年ほどは代表に呼ばれたことが一度もない。

「サイドチェンジ！」

キャプテンである野本茜の叫びを背後に受け、優衣は大きく左サイドへと蹴った。

弧を描くボールは、天からの叩きつけるような雨に押されたのか、優衣のキック力が貧弱であったのか、急速に落下して地に落ちてしまったが、しかし今度はその雨によって氷の上を滑るかのように転がって行く。

西田久子が駆け寄り、拾うと、すぐにイレブンターキー北海道の選手が二人、突っ込んできた。久子は背中を使って巧みにボールキープ。と、突如反転、足に吸い付くような柔らかくそして迷いのないボールタッチで、二人の間を一気に突き破った。土砂降りの中を、独特な足取りでぐいぐいと上がっていく。相手のボランチが駆け寄ってきているのを横目で確認すると、素早くアーリークロスを上げた。利き足ではない左であったが、ゴール前へと速く低い、実に精度の高いボールが上がった。

そのクロスをアシストという記録にすべく、FWの実合美摘さねあみが飛び込んだ。

ヘディングシュート！

二人のDFに挟まれた美摘は、すっと抜け出してボールに頭を叩きつけていた。

決まったと思われたが、しかし、GKの相澤美奈が、横っ飛びでボールを弾いていた。

押し込もうと俊敏な反応を見せた辻内秋菜つじうちあきなであったが、しかし瞬きするほどの僅かな差で、DFに大きくクリアされてしまう。

大きく弧を描くボール。

またハイボールが自分の方へと飛んできた。篠原優衣は、滝のような豪雨の中、ボールを見失うまいと凝視、目測し、後ろへ数歩下がった。

だが、このあまりにも酷い雨に、目測を思いきり誤っていた。下がり過ぎた。慌てて前に出ようとした時には、すでに落下地点には相手FWが入り込んでいた。七番の、伊生七海よしおななみだ。

彼女の背後に付いた優衣であるが、腕をうまく使われて密着することが出来ない。優衣の方が十センチほど背が高い、くつつくとさえ出来ればポジショニングのミスを取り戻せるのに。

優衣は結局、百五十もない小柄な選手を相手に競り合いに持つていくことすらも出来ずに、あっさりとボール所有権を譲ってしまった。

伊生七海がドリブルに入ろうとしたその瞬間、ボランチの野本茜がスライディングでボールを弾き出し、なんとかタッチラインに逃れた。

味方の多くが攻め上がっていたため、ここで流れを切っていないかったなら失点していたかも知れない。ここは警告覚悟でも止めるべき場面であった。幸いにしてイエローカードは出なかったが。

「優衣！ 集中しろ集中！ 途中からのくせに、そんなくらいも出来ないんか！」

野本茜はキャプテンらしく、叱咤のきつい雷を選手へと落とした。「はい、すみません！」

ミスをしてなお、ぼーっとしていた優衣は、茜の怒鳴り声にびくりと肩を震わせ、飛び上がった。

イレブナーキー北海道、やがみはるか谷上春香のスローイン。

なつきえいこ夏木英子がずっと前進しながらボールを受けたが、石巻ベースパロウの沼尾妙子がうまく身体を入れて、ボールを奪い取った。

すぐさま逆サイドにいる西田久子へと展開。

なにぶん女子の筋力であるため助走をつけてしっかりと蹴らないと、端から端までは届かない。途中で失速して、バウンドして転がった。

久子は、自ら走り寄ってそれを受けた。プレッシャーのない中を様子を見るようにゆっくりドリブルで上がり始めたかと思うと、いきなり前方へとグラウンダーのパスを出した。

それは絶妙なスルーパスであった。

相手DF二人の間をするりと抜け出した辻内秋菜が、そのボール

を受けた。

秋菜は自慢の俊足で、ゴール前へと突き進んだ。

絶好の機会に、ベイスパロウサポーターの喚声や太鼓の音が大きくなる。

GKと一対一になった。

相手の動きをよく見て、右のアウトに引つ掛けたシュート、ゴール隅へとうまく流し込んだつもりであったが、あと数センチ精度が足りず、ポストに直撃して跳ね返った。

秋菜は心の中で舌打ちした。

だが、

跳ね返って転がるそのボールに、ボランチの位置から駆け上がってきていた篠原優衣が素早く詰め寄っていた。

GKがバランスを失って倒れているため、もうぼっかり空いた無人のゴールに蹴り込むだけ、ただボールに触れるだけだ。

しかし、次の瞬間ベイスパロウの選手たちに湧いた感情は、落胆の二文字であった。

なにをどう間違えばそのようなことが出来るのか、どういった物理法則または神々の悪戯なのか、優衣はゴール前二メートルの距離から、触れるだけでよかったボールを、ほとんど真上へと打ち上げてしまったのである。

落胆に天を見上げ、頭を抱え、地面を蹴るベイスパロウの選手たち。

無理もない。耐えに耐えてようやくめぐってきた、同点に追い付く決定的なチャンスだったのだから。

「優衣、お互いドンマイ」

秋菜はちよつと元氣なく、優衣の肩を叩いた。そう、元は自分がシュートを外したことだから。でも優衣の方が、遥かにゴール決めの簡単だったと思うけど。

イレブンターキーGK、相澤美奈のゴールキックは、雨風に押されて大きく右にそれ、ハーフウエーラインを少し越えた辺りでタッ

チを割った。

ベイスパロウのスローインに変わった。

右SBの布部洋子ぬのへやうこは、助走をつけて遠くへ放る素振りを見せつつ、ふわりと軽く投げて、すぐそばにいる沼尾妙子へと渡した。

胸で受ける妙子であったが、そこへ相手のMFである木本弥生きもとやよいが体当たりのような激しい勢いで突っ込んできた。妙子へのスローインを読んでいたというより、読んでいなかったからこそ、強引に奪おうと襲い掛かったように見える。

妙子もその勢いに処理が少し遅れ、ボールは二人に挟まれ蹴られ高く跳ね上がった。

ベイスパロウのCBである田中圭子が、そこへ素早く走り寄って、軽くジャンプして頭でボールを跳ね上げた。

木本弥生の頭上を飛び越えて、野本茜のほんあかねへと渡った。と、そこへイレブンターキー北海道の十一番、寺田元美てらだもとみが突進してくる。

茜は反転、寺田元美へ背を向ける。スリッピーなグラウンドに足を滑らせて転んでしまうが、倒れたままなんとか寺田元美からボールを守り、沼尾妙子へと転がした。

妙子はボールを受けると素早く反転し、前を向いた。

その瞬間、木本弥生が真横から激しいスライディング。

雨で地面との摩擦がきかないこともあり、妙子はまるでボーリングのピンのように吹っ飛ばされた。

それは最初から足だけを狙っているような、悪質なプレーにしか見えなかったが、しかし笛は吹かれなかった。

ベイスパロウのゴール裏サポーターから大ブーイングだ。

といっても十人ほどしかいないのであるが、だが心強い援軍が、
「ブーーーーーッ！ ブーーーーーッ！」

ベイスパロウのベンチから、笹本義夫監督が加勢しているのだ。そのあまりの激しさに、隣にいる榎戸朱美コーチがちょっと引いてしまっている。

ボールを強奪した木本弥生は、前方へパスを転がした。

雨ですつと伸びるボール。野本茜が懸命に足を伸ばしたが、あと半歩のところで届かず。

パスを受けた七番の選手、伊生七海は敵陣をドリブルでぐいぐいと進んでいく。彼女は百五十センチ弱と小柄ながらも非常に足が速く、そして非常に技術力にも優れた選手である。女子日本代表、いわゆるなでしこジャパンに選出されたこともあり、ベースパロウにとって最要人物である。

その伊生七海の突進を受けるように、ずるずるとベースパロウのDFラインが下がっていく。

伊生七海は野本茜のプレスをかわしてついにPA内に侵入すると、素早いシュートモーションで右足を振り上げた。

だが、振り下ろされることはなかった。

守備に駆け戻ってきた優衣が、背後から無理にボールを奪おうとして、足を引つ掛けて転ばせてしまったのだ。

おそらく倒れたのは演技だ。優衣の足先には、当たった感触などほとんどなかったのだから。

だが、当然の事実ではあるが、サッカーの判定にて最優先されるのは主審の主観、決断であった。

笛が吹かれた。

主審はPKを示した。

「なんで打たせなかった？」

GK堂島秀美の問いに、優衣は改めて周囲を見回した。そしてすぐ気付いた。谷保絹江やほつきぬえと田中圭子のCB二人、そしてSBの布部洋子、三人でしっかりとコースを塞いでいたことを。

監督から充分に注意されていたではないか、伊生七海は仕掛けてくるタイプだと。確かに、ここは打たせるべきだったのだ。

イレブンターキー北海道の選手たちは、してやったりという表情で喜び、手を叩きあっている。

「すみません」

優衣は、そう小さく口を動かすと、秀美に向けて申し訳なさそう

に頭を下げた。この豪雨に、秀美の耳には全く届いていなかったであろうが。

「しょうがないよ」

野本茜は、そういうと優衣の肩を軽く叩いた。

心なしか、雨の勢いがさらに増したようである。

「若い頃から騒がれているとさあ」西田久子が、なんだか怒ったような表情で、近付いてきた。「たいしたことなくなったりするよね、よくいわれることだけど、まさかこんな身近でそれを見られるとは思わなかった」

「そういうのやめな。試合中だよ」

野本茜が、久子の顔を睨みつける。

反省は試合の後。いま選手を責めてどうするか。しかも優衣はメンタル弱いんだぞ。

久子は茜の制止を完全無視。優衣の眼前に立つとさらに言葉を続けた。

「黙ってないで、なんとかいってみなよ、なんとか。……つつかさあ、さつきからなにやってんだよ、お前！」

優衣の胸を強く突き飛ばした。

「さつきからじゃない、最近、おかしいだろ。いつもいつも、ぼけっとしてばかりいやがって。邪魔なんだよ。監督に使ってもらっているんだったら、集中しろ。やる気ないんならやめちまえよ！」

やる気が、ないわけじゃ……

優衣はそう思ったものの、思っただけ、微かに口を動かすことすらなかった。

やる気はある、といえるだけの自信などなかったからだ。

下を向いたまま、ただ滝のように降りかかる大きな雨粒に打たれている。

「久子！ お前こそいまはこの試合だけに集中しろ！」

茜は、久子と優衣との間に割って入った。

久子は面白くなさそうにふんと鼻をならした。

フールを受けた伊生七海は自分でPKを蹴るようで、ペナルティマークにぎゅっぎゅっとねじ込むかのようになり、ボールを置いた。ゆっくり下がって、助走の距離を取る。

石巻ベイスパロウの守護神である堂島秀美はゴールライン上に立ち、相手を睨みつけ、両手を大きく広げて威嚇した。

他の選手たちが緊張して見守る中、審判の笛が鳴った。

伊生七海は、ゆっくりと、ゆっくりと、ボールへ近付いていく。足を振り上げ、振り下ろした。

俗にいうコロコロで蹴ってくるのだろう、と意表をついたのである。実際に蹴ったのは、助走のゆっくりとした様子とは比較にならないくらい、勢いのあるものであった。

先に動いてしまわぬよう最後まで耐え切った秀美は、蹴り足の角度から方向を見切って全身のバネで大きく横へ飛んだ。

方向は合っていた。

しかし相手の嫌らしい駆け引きにより、若干タイミングをずらされていた。

それでも懸命に指先を伸ばしてボールに触れたのは、さすが元日本代表といったところであったが、だが弾かれたのはボールではなく、指の方であった。あまりに指の先端であったため、威力あるボールに負けてしまったのだ。

ゴールネットが大きく揺れた。

イレブンターキー北海道 2 0 石巻ベイスパロウ

序盤に連係ミスから失点しながらも、じつと耐えて同点のチャンスを探っていたベイスパロウの選手たちであったが、しかし、ついに二点差に広げられてしまった。

堂島秀美は両手でピッチを何度も叩き、悔しがった。あとほんの一瞬でも、決断が速ければ絶対に防げたのに、と。

PKを招いてしまった優衣は、呆然と突っ立っている。選手たちが、それぞれのポジションに戻っていく中、西田久子が、どんと肩をぶつけてきた。わざと当たってきたのかどうかは分からないが、

知らぬ顔で走り去っていく。

「ほら、優衣、下向かないの！」

茜が背中を叩き、叱咤する。

後半三十分、点差を考えると、もう時間がない。

ここで石巻ベイスパロウ監督の笹本は二枚目のカードを切った。

左SBの仙田チカを下げて、久木成美くきなるみを投入した。

久木成美はCBの選手なので、DF登録同士の交替である。しかし彼女はピッチへ入るや前線に張り付いた。

監督は大声で叫ぶ。

それは実にシンプルな指示であった。

「全員、上げれ！」

守備の枚数を減らしたベイスパロウは、パワープレイに出た。

戦い方はいたって単純。

久木成美と実合美摘、身長百六十六センチコンビのツインタワーにロングボールを放り込む。

他の選手は攻め上がる。

ただそれだけだ。

どうせ、このままでも負けてしまうのだ。勝てる可能性のあることを精一杯やるしかない。

二点差で終盤ということもあり、ベイスパロウの選手たちは簡単にボールを持つことが出来るようになっていた。持ってはすぐに、久木成美と実合美摘のいる辺りを目掛けてボールを蹴った。

百六十六センチがそこまで巨体というわけでもないのだが、イレブントーキ―北海道の3バックは全員が百六十もないため、試合終盤の力押しとしてはそこそ有効な作戦といえた。

だが、相手も必死であり、先に良い位置を取られてしまったり、身体をぶつけられたりして、なかなかツインタワーにボールがおさまらない。しかし下手な鉄砲もなんとやらで、ついに久木成美の頭へどんぴしゃりのボールが届いた。

成美は、ボールの勢いを殺すように上手におでこで受けると、身

体を捻って相手に奪われないよう守りながら、胸を滑らせるように落とし、足におさめた。

後方から一気に上がってきていた野本茜が、成美の横を駆け抜ける。

見事なボール交換。一瞬にして、茜の足元へとボールは渡っていた。

相手守備陣を完全に抜け出した。

ゴール前にはGKだけだ。

PA内に入ると、GKの位置や動きを冷静に見、GKの脇を抜けるシュートを放った。

GKは全然反応することが出来なかった。茜の蹴るタイミングがあまりに正直すぎて、それ故にかえってタイミングをずらされてしまったようであった。

しかし、あと僅か精度が足らず、クロスバー直撃。

だがベイスパロウの攻撃はまだ続く。

茜と同じくボランチである優衣も、上がってきていた。

ポストに当たって大きく跳ね返ったボールを、後方へ下がりながら胸トラップ。即座に相手の守備三人に取り囲まれたが、優衣は、胸でボールを押すようにしながら、足元に落ちるまでにまず一人かわした。足元に落ちた瞬間、右に、左にと軽いタッチでボールを転がしたかと思うと、既に残る二人も抜いていた。

一瞬にして三人を抜き去ったプレーに、観客席からどよめきがあった。

優衣は、利き足と反対である左足で、ボールをゴールネットへと転がした。

逆をつかれたGKが、足を踏ん張って慣性に逆らおうとしたその瞬間には、そろっと、ゴールネットが揺れていた。

優衣のシュートが決まり、これで一点差になった。

サポーターの太鼓の音。

だが、優衣にとって汚名返上のゴールとはならなかった。

押せ押せであつた後半ロスタイム、またもや優衣の痛恨のパスミス、それが起点となつて、カウンターから失点してしまったのである。

またしても得点者は伊生七海。ハットトリックだ。

ゴールと同時に、笛の音が、土砂降りの競技場に鳴り響いた。試合終了。

イレブンターキー北海道 3 1 石巻ベイスパロウ

2

「あ、は、はい！」

篠原優衣はびくりと肩を震わせると、慌てたように立ち上がった。黒板を見て、先生の顔を見て、そして俯き加減に小さく口を開いた。「分かりません」

ここは石巻聖亜女学院。宮城県石巻市にある、来年が創立百周年という伝統のある女子高である。

現在、三時限目。二年三組の教室は、英語の授業中である。

「黒板を見たつて問題なんか書いてないぞ。篠原、お前、分からないというより、聞いてなかったただけだろ。もう一度いうから聞けよ」英語教師の尾高和弘の言葉に、優衣は自信なさげに、小さく頷いた。

「昔の人の、有名な言葉あるだろ。我思う故に我在り。それと、敵を知り己を知れば百戦危うからず。それぞれを、英訳してみる」

「はい」

優衣はゆっくりと黒板の前へと向かい、前に立つと、特に考え込むこともなくすらすと白のチョークで綺麗な筆記体を書き始めた。

I think, therefore I am.

Know your enemy, know thyself.

...

チョークを置いた。

おずおずと、先生の顔を見る。

「正解。完璧」

尾高先生が拍手をすると、教室のあちこちから、おーっと感嘆の声があがった。

「でもな、授業はちゃんと聞いておけよな」

「はい。どうもすみませんでした」

優衣は申し訳なさそうに、小さく頭を下げた。

「あたしまーったく分からなかった」

「あたしも。つかそんな格言聞いたことない。弱肉強食くらいしか知らん」

「それ格言じゃないよバカ」

などとざわつく中を、優衣は相変わらずおどおどしたような俯き加減のまま、静かに席に戻ると腰を下ろした。

授業は進み、それから十五分ほどもすると、終了のチャイムが鳴った。

尾高先生が出ていくと、教室は大爆発でもしたかのようにどっと騒がしくなった。

毎度毎度の光景。十代女子、パワーが有り余っているのだ。

優衣の座っている窓際の席へと、いつものように友達が近寄ってきた。

ふもとえみ こすげようこ
麓絵美と小菅洋子の二人だ。

この二人、なにからなまでに対照的なのである。麓絵美は上下から押し潰したみたいに背が低くてずんぐりむっくりとした体型。性格は豪放磊落。ちよつと無神経なところがたまにきず。小菅洋子は上下から機械で引っ張って伸ばしたかのようにひよろひよろとした体つき。性格は生真面目の一言。

「優衣さあ、まあたばーつとしてただろー。なんかさ、最近疲れてんじゃないの？ 性格暗いのはもともとだけど、そんなんじゃなくて、困ったことでもあって塞ぎこんでるみたいな感じだよ」

麓絵美がなんだか失礼なことを、場所も構わず大きな声で口に出した。

「そんなこと、ない」

優衣は否定する。暗いということではない。それは自分も認めている。困って塞ぎこんでいるということだ。

「そう？　ほんならいいけど。実はあたしの方こそ最近つつつか今日はお疲れなんだよね。昨日ア二キに、極上たまごのふるふるプリン食われちゃってさあ。それで取っ組み合いの大喧嘩しちゃって、まあほんとに疲れた」

絵美は、がははと豪快に笑った。

「ちよっとお疲れの意味が違う気が。でもさあ、ぼーっとしても、すらすらと先生の質問に答えられちゃうのが凄いよねえ。さすが天才少女」

小菅洋子がさらりと、しかし大袈裟に褒める。

中学三年生の頃、優衣はテレビのドキュメンタリー番組に出たことがある。中学生ながらなでしこリーグでプレーする天才サッカー少女で、学校の成績も優秀、という扱われ方であった。中学時代からの親友である洋子は、それを引き合いに出して、すぐからかってくるのだ。

「洋子だって、解けたでしょ」

優衣はぼそぼそ呟くようにいうが、教室の喧騒に掻き消されて、二人の耳には届いていないようだった。わざわざいい直すほどのことでもないのに、優衣はそれきり黙っている。

親に、サッカーを続けさせてもらうための条件として、夜は必死に勉強をしている。

だから、そこそこの成績を保っている。

ただそれだけだ。

決して天才などではない。

優衣は自分のことをそう分析している。勉強だけじゃない。サッカーにしてもそうだ。自分には天から与えられた才能など、なにかない。

それに対して洋子は、一を聞くだけで十を知ってしまうタイプだ。

勉強しているそぶりをろくに見せないくせに、成績はいつも上位。こういうのをこそ天才というのではないだろうか。

実は洋子も夜は机にかじりついているのかも知れないが、それにしたって、自分よりは遥かに勉強時間は少ないだろう。それで上位なんだから、やっぱり洋子の方が凄いと思う。

3

陸前稲井駅から徒歩二十五分ほどのところ、広大な田畑に囲まれた中にぽつんと住宅地が存在している。

篠原優衣の自宅は、その中にある。

外れの、田畑に面したところにあり、秋の昼などは窓を開けると稲穂による黄金の海が広がるが目に見事な眺めになるが（住んでみると慣れてなんともないが）、今は初夏でしかも夜、なにも見えやしない。街灯のほとんどない地区で、ただ漆黒の海が眼前に広がるばかりである。見所を強いて上げるならば蛙の大合唱といったところか。

優衣は今、その蛙の大合唱を聞きながら、二階の自室で学習机に向かっている。

学校の予習と復習を終えて、課題をやっているところだ。それが終了したら今度は、志望大学受験に向けての勉強をしなければならぬ。

机の上のアナログ置き時計は、七時三十分を示している。

休日である今日は、早朝から勉強、そしてアルバイト、昼はサッカー、夕方に家に帰ってきてからまた勉強だ。

もう三時間近く、ずっと机に向かっていたため、頭がぼーっとしてきた。

ちよつと休憩をとることにした。

空になったコーヒークップを手に、自室を出て階段を下りる。

居間でテレビをつけるが、どの番組もつまらなさそう。結局いつものことではあるが、消去法によりNHKニュースに落ち着いた。

電気ケトルでお湯を沸かしている間にと、床に腰をおろして膝や股関節のストレッチなどをしていると、廊下の向こう、玄関ドアの開く音が聞こえた。

父が仕事から帰ってきたのだ。

「ただいま」

まもなく居間に父が姿を現すと、優衣は柔軟で床にぴたりと付けていた頭を持ち上げた。

「おかえりなさい。なにか作ろうか」

立ち上がった。

「ありがとう。それじゃ、お願いするかな」

父、篠原正昭は、スーツの上着を脱いでハンガーにかけた。

彼は中肉中背の、柔和な顔といった以外にこれといった特徴のない男である。

優衣はこの家で、正昭と二人で暮らしている。

やたらと気が弱く、そして非常に口数が少ない父である。でも優衣は、自らの気の弱さは欠点だと思っているくせに、父に関してはまったくそうは思っていない。二人でいつまでも口を開くことなく同じ部屋にいても、気まづくなることもないし、そういう面での相性はいいのではないかと思っている。

二人暮らしをしているのは、もちろん母親がいないため。優衣がまだ乳幼児であった頃、自分の時間が持てないことにノイローゼ気味になった母親の育児放棄が原因で、両親は離婚をしたのだ。

仕方のないことではあるかも知れないが、一人で働かなければならない正昭の子育ても、かなりいい加減なものになってしまい、優衣は祖父宅と自宅と保育所を行ったり来たりといった、そんな乳幼児、幼児時代を過ごしてきた。

娘はきつと両親を恨んでいるに違いない、と父は思っているようなのだが、正直なところ少なからず恨んでいる面も確かにあり、二人の関係になにか問題があるとすれば、そういった点であろうか。それでもそれなりに、幸せに生きてきたつもりではあるが、しか

し……

優衣は遠い目になり、先日見てしまったものを、無意識に回想していた。

瞬きすると、首を振り、その記憶を追いつつた。

胸に、手を当てた。

鼓動が速くなっている。

ゆっくり、深く呼吸をした。と、ちよつと焦げたような臭いが鼻に飛び込んできた。優衣は慌てて炒め物を素早くヘラで掻き回した。焦げかけていたが、ぎりぎりセーフだった。

優衣はおでこの汗を拭くと、ため息をついた。料理を救った安堵のため息なのか、それとも別の何かなのか、自分でも分かっていない。

火を止めると、次いで隣の鍋を味見しながら味を整える。

などとやっているうちに、父、正昭が風呂から出てきた。

「あ、ちようど出来たとこだよ」

それほど父が長風呂であつたわけでもないのに、短時間のうちに電子レンジに頼らずしつかり調理された、そして女性らしく色あざやかな盛り付けの料理が完成、テーブルの上に次々とならんでいく。あまり考えずに適当に作つたので、和洋ごっちゃになってしまったが。

「おー、これは凄いなあ」

正昭はテーブルに着くなり早速と箸を取る。

「せっかくだから、わたしもちよつと食べよ」

優衣も小皿を取ってきて、テーブルに着いた。まだまだこの後も勉強しなければならなのだし、カフェインと砂糖だけじゃ、頭も回らないから。

「うまい。優衣は本当に料理が上手だよな」

正昭は、お世辞でなく、娘の料理を褒めた。

だが、それも一言だけ。その後は、ずっと黙ったきり、黙々と箸を口に運んでいる。

美味しいのは間違いないのだし、一口ごとに褒めることもないだろう。と、基本無口な父である。

テレビのチャンネルは相変わらずNHKであるが、もうニュースは終わっており、健康バラエティ番組をやっている。油っぽいものを食べる際に、ちょっとした工夫で、血液ドロドロを防ぐという特集だ。

「なあ、優衣」

正昭は箸を置いた。

「なに？」

優衣はテレビから父の顔へと視線を向けた。もともとテレビに集中などはしていなかったが。

「お前、あの日さ……」

二人は見つめ合った。

ほんの僅かの時間であつたが、緊迫した空気がこの場を支配した。

「いやいや、なんでもない」

父はまた箸と小皿を取ると、食事を続けた。

「え、なんの話？ あの日って」

そんなこと聞くまでもなく分かっているというのに、優衣のほうこそ、とぼけてみせることでその場をごまかした。

そうしてうやむやにすることが、ますます自分の精神を追い詰めていく、そんなこと、よく分かっているはずなのに。

でも、どうしようもなかった。

勇気が欲しい。

ほんの少しでもいいから。

優衣は心の底から、そう願っていた。

4

「そう、そこで挟み込め！ ダナエ、そこでパスコース塞いどくんだよ！ 茜も、そこでがっとながんなきゃダメだろ！ ばーっと見てんな、バカかお前は！」

笹本義夫監督の怒声が、先ほどからひっきりなしだ。

日本女子サッカーリーグ所属、石巻ベイスパロウのチーム練習風景である。

ここは石巻ランドと呼ばれている、クラブ専用の練習施設。

数年前に潰れてしまったが、それまで隣の敷地にそういう名の遊園地が存在していた。現在、練習場を指す名前だけが関係者に通じる言葉として残っているのである。

篠原優衣は野本ハルからのボールを胸で受けると、ほとんどその瞬間に、もう走り出していた。ボールを扱う技術全般に対し、非常に優れた才能を持っている優衣であるが、その中でも特にトラップ技術は高い。フル代表の選手でも、彼女ほどの技術を持つ者はいないだろう。代表で米国相手にゴールを決めた試合の後、やたらと天才少女とメディアに持ち上げられた時期があつたが、それも伊達ではないのだ。本人には、まったく自覚はないようだが。

ルースボールに駆け寄って拾った優衣は、簡単なフェイントで柴野英子のえいこを抜くと、パスコースを探す。

「そこで潰せ！」

監督の号令の下、布部洋子ぬのへようこと棕愛子むくあいこの二人が優衣を挟み込んだ。パスかドリブルが一瞬迷った優衣であるが、ドリブルを選択。だが棕愛子の足に引っ掛かって、転んでしまった。

「寝てんじゃねえよ。眠いんならとっとと家に帰って寝ろ！」

監督の怒鳴り声を受け、優衣はすぐに立ち上がると、奪われたボールを追って走り出した。

優衣はトップ昇格してからというもの練習がオフの日と遠征の日以外はほとんど毎日ここに通っている。例外は、一度だけ風邪をこじらせてしまった時と、膝の靱帯を負傷した時と、代表に呼ばれた時くらいだ。その、靱帯を傷めたというのも、代表戦が原因なのであるが。中国女子代表の選手に、ドリブルしているところ背後から激しいスライディングを受けたのだ。

オフの日以外は毎日練習に参加しているといっても、別に褒める

ほどのものではない。トップリーグに所属しているチームの選手ならば、持って当然の感覚だからだ。大半の者が無給の身であるとはいえ、トップリーグの選手として練習をさせて貰い、全国規模の高水平な試合をさせて貰っているのだから。

トップリーグに所属しているチームに入った以上は、暗黙の了解としてサッカーを最優先事項とする義務が生じる。それが嫌ならば、最初から友達を集めて草サッカーをやっていた方がいいのだ。どちらが良いのか、選択権は本人に与えられているのだから。

でも優衣はこれまで、そんな義務感などではなく、単にサッカーが好きで楽しくて仕方がなかったから、苦しくても叱られても、毎日の練習に参加していた。しかしここ最近のことであるが、これまでの優衣を知っている者からすれば、現在の優衣は、なにかを忘れたくてサッカーに取り組んでいるように見えた。でもそれを忘れることが出来なくて、サッカーにも集中出来ない。

実はそのこと、優衣本人も自覚している。だからといってどうしようもなかった。

谷保絹江がスライディングでボールをカットした。

優衣へとパスが来る。

右足で受けたその瞬間、野本ハルが目の前に立ちはだかった。

対峙は一瞬。

優衣はボールを足の裏で引き寄せたかと思うとその瞬間、ちゃんと前へ蹴り、ハルの股の下を通して、自身は横を抜けた。

しかし抜け出したところで、沼尾妙子に転ばされてしまった。

全力で加勢に戻った妙子は、その勢いを殺せずに、つい両手で突き飛ばしてしまったのだ。

「優衣ちゃん、ごめん」

妙子は両手を合わせ、笑顔で謝った。

「そんなくらいで転がってるほうが悪いんだよ。早く起きてボール置きな」

西田久子は倒れている優衣を一瞥し、通り過ぎた。

優衣は起き上がると、ボールを拾い、先ほど倒されたところへ置いた。

F K。蹴るのはファールを受けた優衣自身だ。

得点が狙える距離のF Kは、優衣がいるときには任されることが多い。筋力がないので、遠くまで飛ばそうと力強く蹴ると、どこへ飛ぶか分からないようなボールになってしまうのだが、しっかり届けられる範囲内であれば、優衣は非常に高いキックの精度を持っているからだ。

優衣は倒された位置に、ボールを置いた。

ゴール前にはビブス組と非ビブス組が押し合い、ひしめき合い、優衣の蹴るのを待っている。

「優衣、いいボールちょうだいね！」

ニアで待ち構える辻内秋菜が、両手を激しくぶんぶん振り、大声を上げてボールを要求している。

優衣は片手を上げて蹴る合図を送ると、ゆっくりと助走を付け、蹴った。

どつ、と足にいい感触があった。

大きな弧を描いて、ボールはゴール前、秋菜の待つニアをすつ飛ばして、ファーへ。

速度がなく、ふわりゆったりとしたボールであったが、G Kが飛び出しに迷う絶妙な位置に落ちると、野本茜がうまく頭を合わせてゴールネットを揺らした。

力強くガッツポーズを取る茜。さすがキャプテン、と自画自賛の表情だ。

「ゆーいー、なんでこっちにくれなかったのー」

秋菜がうらめしそうな声を上げている。

「優衣、よかったぞ。いいボール上げたな。茜のゴールはおまけだよ。さっきまで選手たち全員に怒鳴り散らしていた笹本監督であるが、ようやく満足げな表情になると優衣に拍手を送った。

「くまひげさん、おまけって、なんですかそれ！」

頬をふくらませて、むくれっ面のキャプテン。まるで餌をたつぷり詰め込んだハムスターだ。

くまひげさんとは笹本監督のあだ名である。ずんぐりむっくりとした体型で、腕も毛深く、あごひげももしゃもしゃと生やしているところが、なんだか熊を連想させるからだ。十代の選手は恥ずかしがって「監督」と呼ぶ者が多いが、それ以外の者は大抵、「くまさん」、または「くまひげさん」だ。

優衣はいま見せたようにFKの精度も秀逸であるが、それだけでなく、ボールを扱う技術全般として実に非凡な才能を持っている。伊達に代表に選ばれてはいない。

欠点はフィジカルの異常なまでの弱さと、スタミナがないことであるが、そこは認識しておけば使い方でカバーが出来る。実はそれ以外にも、優衣には致命的ともいえる欠点があった。監督によつては試合に出すことを躊躇、いや、ベンチ入りすら躊躇するほどの。

いまのところは、それは表れてはいないようであるが。

さて、仲間内での紅白戦とはいえ勝負は勝負。先制されたことにより、非ビブス組が熱くなった。

ボールを持った茜に対し、徳山神末とくやまかんみがスライディングタックル、つい激しくいつてしまい、転ばせてしまった。

だが茜は倒れながらも足でくわえ込むようにボールを守り、野本ハルへとパスを出す。

ハルにすぐさま柴野栄子と沼尾妙子の二人掛かりのプレス。

優衣はフォローに動き、ハルからのボールを受けた。だが今度は自分がプレスを受けて、出しどころを探しているうちに、柴野栄子に肩をぶつけられて、よろけたところを奪われてしまった。

茜がスライディングカットで奪い返した。

しっかりボールにいつていたのでファールではないが、しかし、非ビブス組の激しくなってきたのに合わせて、ビブス組も熱くなってきた。

それは、最初は茜や寺田なえなど、中盤だけのことだったのだ

が、その尖った雰囲気はあつという間に全体に伝播してしまっていた。

優衣はパスを受けたが、今度は布部洋子と棕愛子と、また二人に挟まれた。右に左に軽快なステップでボールを守るが、それは身体が勝手に動いているだけで、精神的な余裕などは完全にどこかへ飛んでしまっていた。

「優衣！」

FWの辻内秋菜が、優衣のフォローのために下がってきた。

しかし気迫のこもった相手のプレスに頭が真っ白になってしまった優衣は、相手チームである沼尾妙子の方を向くと、そのままボールを渡してしまった。

「また、出ちゃったか」

がくりとうなだれる秋菜。

これが、優衣の致命的な欠点である。

相手の過剰な気迫を受けると、プレッシャーを感じてしまい、見るも無惨な状態になってしまうのだ。

もちろん試合では、相手が気迫を持って当たってくるのは当然。

最初は優衣も頑張るのだが、なにが引き金になるのか、なにかでスイッチが入ってしまうと、もうおしまい。いま見せたような、ミスプレー乱発の酷い状態になってしまう。

そんな自分に動揺して、どんどん酷くなっていくという悪循環に陥ってしまう。

九十分保ったこともあるし、代表ではその癖があまり目立たなかったから、これまで毎年のように呼ばれてきたのではあるう。一種の爆弾である。

今日もそれを、紅白戦が終わるまで余すところ無く見せてくれた。「ほんつとメンタル弱すぎ」

もう野本茜も苦笑するしかないといった様子だ。
でも……

以前はダメなりにとことん食らいついて、最後まで闘志見せて頑

張っていたのにな。なんか、あったのかな。

あいつ、いつも暗いから分らないんだよなあ。

精神面さえ改善出来れば、いまフル代表に呼ばれたっておかしくないのに。

今度なんかあったら度胸付けに、罰ゲームでショートコントやらせたらか。

……泣き出しちゃうか。

5

異様に密度の濃そうなぶ厚い雲が、夏の星空を完全に覆い隠してしまっている。

どんよりどんよりと曇った夜の空が、一瞬、昼間になったかのようになつて白に光った。

どどどどど、ん。

何秒か遅れて、低い音、振動が空気を伝わってきた。

天気予報では終日快晴のはずであったのに、実際の空はいまにも雨が降り出しそうだ。

篠原優衣は、駅前の通りを歩いている。

グレーのスカート、白いブラウスの上には薄い素地のグレーのベスト。高校の夏服だ。

石巻ランドでサッカーの練習を終えて、その帰宅途中である。

中高生は私服に着替えてから練習に向かう者も多いが、優衣の場合、一度石巻を通り越えて、戻って来ねばならないし、電車は一時間に一本だし、だから学校帰りにそのまま石巻ランドへと向かってしまうのだ。

見るからに足取りが重そうなのは、初夏の湿気や汗が服にじっばりと染み込んでいるというだけではない。練習の疲労というだけではない。

ここ最近、常にこうなのである。

倦怠感、とでもいうのだろうか。

いや、それとは少し違うか。

とにかく、ちよつとずつ、すべてのことが、考えるのも面倒なくらいに、どうでもよくなっている。

これまでの優衣は、とにかくサッカー優先の生活を送っていた。物理的な時間の使い方というだけでなく、自分の精神的立場という意識の持ち方としても。要するに、自分はサッカー選手であるという自覚を持って生きてきたということ。

優衣がサッカーを始めたのは、小学二年生の夏。

何においても自信のない自分との付き合いが嫌になり、これだけは負けないというものを作ってみたいと思っていた時、脳裏に「サッカー」という野太い声が聞こえてきて、それで興味を持つようになったのである。おそらくその声は幻聴だったのであるが、何故だか優衣は、いまでもはつきりとその声を覚えている。

そうしてサッカーを始めた優衣であるが、自分とはかく周囲がその才能に気付くのに、さして時間はかからなかった。

そしてその競技は、優衣自身にも向いていた。
のめり込んだ。

自信がついたというわけではなかったが、間違いなく成長を感じることが出来たから。

いつかそれが人生においての自信になることを信じて、優衣はサッカーを続けた。

小学六年生の夏、当時の所属チームの監督に推薦されて、石巻ベイスパロウのセレクションを受けて、合格、入団。

その後、世代別代表に選ばれ、所属チームでも中三の夏でトップの試合に出場するという異例の早さで公式戦デビューを果たした。

自信ができましたとは堂々どころかささやかにいえないけれども、何かに頑張れる自分を発見できたことは、実感こそないものの自信に繋がっていくものだったのかも知れない。

とはいうものの最近、試合でも練習でも、自分の情けなさを見せつけられることばかり。

サッカーだけではない。勉強だって必死になってやっているつもりだけれども、親が望んでいる仙台の国立大学は、この前の模試の成績から考えてちよつと難しそうだし。

それに……

優衣は首を横に振り、ついつい思い出しそうになる記憶を追い払った。

あんなの、見なければよかったのに。

そうすれば、これまで通りだったのに。

ため息。

チームや学校で、みんながいつていた通り、自分は気が抜けてしまっているのだろう。

世の中、自分なんか比較にならないくらいに苦しい目にあっていたり、空虚感に悩まされている人はいる。

それに比べればなんということのないのは分かるが、でもやっぱり自分は強くない。

辛いから自殺してしまおうなど、そんなつもりは毛頭ないが、今日死ぬ運命だというのならば、それはそれで構わない。

そんな精神状態がいつまでも続いていること自体が辛かったが、だからといって自分でどうこうできるものでもなかった。

もう少し、勇気があればいい。

ただ、それだけなのに……

また、ため息をついた。

いきなり、どつと天を突くような大きな喚声が聞こえてきた。いや、先ほどから聞こえてはいたのだが、意識がまったく気付いていなかった。

宮城牧野添スタジアム、現在はネーミングライツで羽田電工スタジアム、ここから、その喚声は聞こえてきていた。

いま優衣の歩いている、この大通り沿いにあるスタジアムで、現在Jリーグの試合が行われているのである。

どんどん、どんどん、と太鼓の音。

両チームを応援する、熱狂的な喚声。

そして、小さな女の子の笑い声。それはスタジアムからではなく、優衣のすぐ近くから聞こえてきた。

優衣は視線を落とした。

前方から幼い女の子が、小さな両手をそれぞれ両親に預け、ちょこちょことした足取りで歩いてくる。

まだ四歳くらいだろうか。

無邪気な笑顔がかわいらしい。

優衣は、ほほえましくなるのと同時に、ちょっと胸が苦しくなるのを感じていた。

ものごころついた時から、「両親」というものを知らなかったから。片親だけの生活だったから。

別に羨ましくなんかない。常々そう思ってきた。

しかし実は羨ましく思っていることにも気付いている。どんなに理屈をつけようとも、自分の気持ちはそう簡単にごまかせるものではない。

「しんごー変わっちゃうよ！」

女の子は、そう大きな声をあげて両親の手を振りほどくと、横断歩道を走って渡り始めた。

自分だけ渡り切ったところで両親が来なければ急いだ意味がないのに。ただ反対側で待っていたいのだろう。両親が子供のように遅れてやってくるのを、自分の方が大人になったつもりで。

家族、

三人で、

笑顔、

お母さん……

優衣は、苦しそうに顔をしかめ、胸を押さえた。

その時である。

どとどと、と低いエンジン音が空気を震わせたかと思うと、大きなトラックが速度を落とすことなく横断歩道へと突っ込んできた。

猛スピードというわけではないが、制限速度は遥かに越えているであろう。

横断歩道側の歩行者信号がちょうどいま赤に変わったところであるが、車側もまだ赤、完全な信号無視だ。

突如唸りをあげて現れ、視界一杯に広がったトラックに、女の子は瞬時に状況を理解することが出来ず、きよとした表情のまま動けなかった。

金切り声のような、母親の絶叫が空気をつんざいた。

優衣はバッグを投げ捨て、車道へと飛び出していた。

何故だか身体が勝手に動いていたのだ。

女の子へと走り寄ると、両手で突き飛ばしていた。

ぎぎぎ、と鼓膜の破れそうな、不快な急ブレーキの音に、優衣は顔を上げた。

突っ込んでくるトラック。

ライトが、優衣の全身を照らした。

眩しさに目を細めたその瞬間、さらに激しい、まるで超新星のような光が、空から降ってきた。

間近で何かが大爆発したかのような、凄まじい雷鳴とともに、世界は真っ白に包まれた。

6

「ぶっ殺す！」

松島裕司はそう叫ぶと、自分のほつぺたをばちばちとひっぱたき始めた。

いつも通りの気合い入れに、チームメイトは平然としたものであるが、対戦相手の選手たちはすっかり啞然としている。

ここは羽田電工スタジアム。

サッカーJリーグ、スズンダマーレ宮城対オミヤンパス岡崎の試合が、これから行われようとしている。

両チームの選手たちはそれぞれに、かわいらしい小さな子供の手

を繋いでいる。間もなくこのエスコートキッズとともに、ピッチへと入場だ。

松島裕司はズンダマーレ宮城の選手である。年齢は二十九歳。身長百八十センチの、快足と泥臭さいプレー売りのFWである。

高卒で、まだ社会人リーグ所属であった宮城に入り、それから宮城一筋。昇格の都度、選手が大幅に入れ替わり、JFL時代にチーム名称も現在のものに変わり、そしてJ2、J1、と、そんな中、松島は常にこのチームにいた。激動の時代の全てを知っており、現在もお主力として活躍していることから、いつの間にかミスター宮城などと呼ばれる存在になっていた。

観客席では、宮城サポーターがタオルマフラーを高く掲げ、毎試合恒例となった宮城県歌を歌っている。

サポーターの合唱に合わせて大声を張り上げている松島。右手を振り上げ、振り下ろし、振り上げ、振り下ろし、そのしぐさのせいのか、野太い声のせいなのか、彼が歌うとなぜだか県歌が軍歌っぽい。「変態野郎、うるせえな！」

さっきからイライラして舌打ちを繰り返していたオミャンパス岡崎の小宮山が、我慢出来ずに声を荒らげた。

全然耳に入っていないのか、松島は腕をぶんぶん振って県歌熱唱を続けている。

小宮山はため息をついた。

彼は松島と、小学校時代の同級生。松島と違って、Jクラブのユースからとんとん拍子にJリーガーになった、いわばエリート街道を突き進む選手だ。高年俸に引き止められて、万年中位の岡崎に所属し続けているものの、海外からの評価も上がってきておりさすがに移籍も秒読みといわれている。選手寿命の短いサッカー選手、二十九歳での海外挑戦を誰も責めることは出来ないだろう。

場内のスピーカーから、観客の喚声を打ち消すような大きな音楽が流れ始めた。それに負けじと、喚声もより大きさを増した。

選手の入場だ。

まずは先頭、宮城のユニフォームを着た女性が四人、大きなフラッグを持ってスタジアムへと入っていく。

続いて審判団。

主審 家信正雄

副審 西尾吉郎、四谷昭夫

の三人が横並び。

そして、選手たち。先頭が歩き始め、松島裕司も続いた。暗く狭い通路から、一気に視界が開ける。

観客席では大勢のサポーターが、タオルマフラーを振り回し、応援の声を張り上げている。

「頑張んねえとなあ」

きらきらと、輝いている観客席を見渡した松島は、そう呟いた。こんなにあくさんの人達が、応援してくれてるんだからな。九十分間、頑張らないとな。

慣れることなく毎度のように、試合前にそう思う松島である。

サッカーをやれる喜びを胸に、必勝の闘志を沸き上がらせ、いざピッチの中へ。

写真撮影を行うと、選手たちはピッチ上に散らばった。

ズンダマーレ宮城は、緑色のユニフォーム。

対するオミヤンパス岡崎はえんじ色、アウェイの地ではあるがフアーストユニフォームだ。

今年から宮城の新たなスポンサーになった、小森田ワイナリーの社長による始球式。

小太り社長が、なんとかかんとかよたよたとボールへ近づいて、蹴飛ばした。

転がることなく上手に蹴られたことで、会場からは大きな拍手が起きた。

それが収まったところで審判の笛。ピッチ上でそれぞれボールを蹴っていた選手たちは、次々と外へと蹴り出した。

ボールはセンタースポットに置かれている一つだけになった。

両チームはそれぞれ集まって円陣を組み、キャプテンである松島祐司の音頭の下大きな声を上げると、再びピッチ上に散らばった。

松島は、ボールを軽く踏みつけ、笛を待つ。

後ろを振り向き、ぐるりと仲間たちの顔を見回す。

主審は、改めて笛を口にくわえると、片手を高く上げた。

笛の音が鳴り響いた。

観客席を埋め尽くす熱狂的な声援の中、ズンダマーレ宮城ボールで試合が始まった。

松島は、相棒の後藤にちょこんとパスを出す。

それと同時に、両サイドの選手が全力で駆け上がる。

後藤は大きく、前線へと送った。

右サイドを駆け上がる大木を狙ったのであるが、跳躍した岡崎の選手に弾き返されてしまった。

しかもただ弾くだけでなく、上手に自分の味方へと落としている。岡崎の選手にボールがおさまると、それからは、岡崎ペースが延々と続く。

宮城の選手が前線から激しくプレスをかけにいくのだが、簡単にかわされ、いなされ、人の少なくなった中盤にボールを通して、ピンチを招いてしまう。

なんとか後ろからラインを押し上げたかと思ったら、今度は相手のロングボール一発で大ピンチ、結局押し戻されてしまう。

サッカーというものは、所属カテゴリーによほどの違いがない限りはペースを握る時間帯がお互いに訪れるスポーツであるが、宮城はいつまで経ってもペースを掴むことなく、岡崎の猛攻に、押されに押され続けている。

岡崎が強豪ならばいざ知らず、かつて一度たりとも上位に食い込んでシーズンを終えたことのないチームだというのに。

宮城としても、引いてカウンター一辺倒とでも出来れば、勝つための戦い方をしているとして少しは引き締まって見えたかも知れないが、しかし監督の考えなのかどう見ても完全ポゼッション指向。

けれどもそれがろくに選手間に浸透していないものだから、結局のところ嫌な奪われかたをしては必死に守備に戻るのを繰り返すばかりで、いたずらに自らの体力を消耗してしまっている。

「こつちよこせ、おい！」

センターFWの松島裕司は、大声を張り上げて、味方にボールを要求する。

しかし宮城の選手たちは、相手の巧みな守備の前に、とてもボールを前に送るどころではなかった。

やみくもに前へ蹴り出してみても、FWの手前で簡単に処理をされてしまう。

こうしてなにも出来ずに、ただ時間や体力が減っていく中、前半二十九分、ついに宮城は失点した。

岡崎のトップ下の選手である小宮山にスループスを通して、抜け出したFWに、あっさりと決められてしまったのだ。

天を仰ぐズンダマーレ宮城の選手たち。

地を叩いて悔しがるGKの本見健一。

そう、もう充分に想像がついていたと思うが、ズンダマーレ宮城は弱いのである。

今日は、先制されるまでもったほうだ。

J1に昇格してから五年、宮城は毎年のように残留のための綱渡りをしてきた。そんな低迷状態から脱却するため、去年の夏に知将と評判の外国人監督を招いた。彼は、J1での宮城の基本ともいえる戦い方であったカウンターサッカーをやめて、ポゼッションサッカーを導入。しかし、知将という評判がまったくの出鱈目だったのか、脳が老いたか、それとも選手たちに技量がないだけなのか、まったく成熟が進まないまま、現在、チームは降格圏内の十七位にいる。

どんどんどんどん。

宮城ゴール裏から、太鼓の音が鳴り響く。そして、サポーターたちの声援。

今日もサポーターたちは、諦めていない。

毎試合のように負けている宮城だというのに、それでも、今日こそは勝つと信じて大きな声援を送っている。

「逆境を……楽しめ」

またもや先制されてしまったことに萎えそうになる気持ちを、こうして大勢のサポーターに鼓舞された松島は、そう己の胸にいい聞かせると、全力で走り出した。

ド根性のスライディングタックルを見せ、相手DFからボールを奪い取った。

完全に足にいつていたが、気迫が誤審を招いたか笛は吹かれなかった。もともとあまり見ていないことで有名な主審であるが。

ボールを奪い取った松島は、前方へ大きくボールを転がすと、それを追いかけて全力で走り出した。

岡崎の守備陣が高いラインを取っていたときに、うまくボールを奪えたものだから、前方には大きなスペースが広がっている。

松島裕司、完全独走だ。

技術よりも、粘っこさや足の早さ、スタミナを売りとしている選手である。広いスペースを一気に駆け上がったのゴールは、もつとも得意とするところだ。

宮城の大チャンスに、岡崎の大ピンチに、観客席全体がどっと沸いた。

松島は走る。

これだから、サッカーっつーのは面白いんだよ。個人がダメダメだってチームワークで強くなることもできるし、反対にチームが元気ないときに個人の頑張りで打ち破ることだって出来るんだから。

それだからサッカーってのは、見る者に、サポーターたちに、感動を与えられるんだ。

だから、このチャンス、絶対、活かす！

松島はまたボールを大きく蹴った。

まるで百メートル走のような全力疾走で、ぐんぐんと、風を切っ

てゴールへ向かって突き進んでいく。

ゴールが近づいて来ると、速度を落とし、小さなボールタッチへと切り替えた。

背後に足音。おそらく追ってきた俊足CBの芹長健三だ。

それにちよつと気を取られた瞬間、正面から、一気に岡崎のGKが飛び出してきていた。

GKは、シュートを阻止しようと、身体を横へ倒した。

甘いよ！

松島はその動きを冷静に見ながら、半歩横へステップを踏み、そして素早いモーションで右足を振り抜いた。

その時である。

どんよりどんよりと曇っていた夜空が突然、カッと明るく光った。凄じい雷鳴。

鼓膜の破れるようなバリバリという轟音が空気をつんざいた。

まるで超新星のような閃光に、すべては真っ白に包み込まれ、すべてが溶けた。

第二章 おれ、誰？

1

「うっしやゴール！」

少女は勢いよく跳ね起きると、絶叫しながら右腕を勢いよく天へと向けて突き上げた。

しん、

と、少女のノリとは裏腹に、周囲は完璧なまでに静まり返っていた。

「およ……」

反応が予期せぬものであったのか、少女はさも不思議そうな表情をその顔に浮かべると、ゆっくりと首を横に動かして周囲を見回した。

眼前には壁、いや、「仙八運送」と巨大な毛筆体。トラックのコンテナ側面のような。

いま少女が立っているのは、大きな道路のど真ん中であつた。

彼女から少し歩道へと寄つたところに、四歳くらいの小さな女の子がうつぶせに倒れている。

「あれ。ここ、石巻駅近くの大通りか？　おい、そこのお前、そんなところで寝転がつてつと危ねえぞ」

と、少女が一步踏み出した時である、

固唾を飲んで様子を見守っていた、歩道にいる通行人たちが、一斉にざわつき始めた。

啞然とした表情の少女であつたが、周囲のその反応に、突然はつとしたように、視線を落として自分の服装に目をやつた。

グレーのスカートにベスト。どこかの学校の女子制服である。

この後の彼女の行動、誰が想像出来たであろうか。げげっと大きな悲鳴をあげると、大衆の面前でスカートに手をかけて脱ごうとし始めたなどと。

「なんつか気持ちが悪いと思ったら、なんだよこれ！ 捕まる！ 変態罪で捕まる！ おいこれ、どうやって脱ぐんだよ！」

果たして脱ぎ捨てるのとその服装でいるのと、どちらが変態罪だかは分らないが、ともかく少女は恥ずかしさを満面に浮かべて、一生懸命スカートを脱ごうともがいている。どうやら周囲のざわつきを、自分の服装のせいであると思い違いをしているようであった。まさか自分のはいているスカートのホックの外しかたも知らないのか、カチャカチャカチャカチャといたずらに音を立てるばかり。腰回りをずりずり回して見たりするが、それで脱げるはずもない。脱げたら脱げたで、それこそ公然わいせつで逮捕されそうなものだが、表情の必死さから、そんな考えなどこれっぽっちも脳裏にないようであった。

「ただ、大丈夫ですか。すみません、居眠りしちゃって、仕事で疲れちゃって」

トラックの運転席ドアが開き、中から小太りの男が飛び出してくると、少女の前に立ち、深く頭を下げた。

「え、え、誰、あんた。なんなの？」

わけが分からず、少女は目をぱちくりとさせている。

少女のそばに小さな女の子が倒れているが、反対の側の歩道にいた二人の中年男女が横断歩道を走って来ると、そちらへと近寄った。

「ヨウコちゃん！」

女性に声をかけられた女の子は、地面に両手をついて、むっくりと上体を起こした。

「なんともないよ。もう雷、行っちゃった？」

そういうと、ヨウコと呼ばれた女の子は笑った。

おそらくこの中年男女は、この子の両親であろう。

二人は娘の見せた笑顔に、ようやくほっとした表情を浮かべた。

「あの、この子を助けていただいて、どうもありがとうございました」

父親と思われる男性が、少女に向かって大きく頭を下げた。

「いや、あの、なんだ、その
しどろもどろ。」

痒くもないのに、ほっぺを人差し指でぼりぼりと搔いている。
自分の置かれている立場が理解出来ずに、なんと返していいの
が分からないようである。

「お姉ちゃん、どうもありがとう」

ヨウコも、大きく頭を下げた。まだ幼く、はっきりと事態を理解
しているわけではないようだ。

「お、おう。まあ、いいってことよ、こまけえこたあ」

少女も少女で、この状況さっぱり理解出来ない。でも感謝さ
れれば気持ちはいい。と、そんな、少女のはにかんだような、むず
痒そうな表情であった。

「ん……待てよ。お姉ちゃん？」

少女は思い出したように、改めて自分の服装をまじまじと見た。

そして、この場から逃げるように、そそくさと歩き出した。

「お嬢ちゃん、お父さんお母さん、そして周囲のみんな、この衝撃
映像は忘れるように。うん、罰ゲーム罰ゲーム。おいてめえら、写
メ撮ったりすんなよな！」

粗野を強調するかのような、これみよがしのガニ股になって、歩
道の人の群れに身体を躍り込ませた。写真を撮られたりしないよう、
携帯電話を手にした若者を威嚇しながら歩いていく。

「お姉ちゃん、忘れ物！」

ヨウコが、道路に落ちたバッグとカバンを指差している。

「そんなバッグ知らねえよ。つつかお姉ちゃんじゃねえ！　こんな
男前のお姉ちゃんなんていねえよ」

遠くから、救急車のサイレン音が聞こえてきた。

音が、どんどん大きくなってくる。

やがて救急車の姿が見えてきた。大通りを真っ直ぐこちらへと向
かってくる。

誰かが通報したのであろうか。

だが、救急車の目的地はここではないようだった。

少女らのいる一つ前の信号を右折して、施設の中へと入っていた。

羽田電工スタジアム。二万五千人収容の、サッカーラグビー兼用の競技場だ。

「そうだ。おれ……いまのいままで、ここで、試合してたはずだ」

少女は自分の記憶を確かめるように、ゆっくりと、呟いていた。

このスタジアムでいまのいままで行われていたのはJリーグ、つまりは男子の試合のはずなのであるが。

「それがなんで、いつの間にか場外に吹っ飛ばされてんだよ！ ギャラクティカマグナムかつーの！ つうか、吹っ飛ばされてこんな服装になるかよ！ おう、わけ分かんねえぞ畜生！」

少女は、うにゃああと叫びながら両手で頭をかかえ、足を踏み鳴らした。なんだかすっかり脳が混乱しているようである。

そんな少女の苦悩も知らず、向こうから大学生くらいの若者が二人、肩を並べて歩いてきた。

一人は携帯電話を手をしている。

「なあ、メール誰から？」

「うん。友達。いまちようど、このスタジアムでサッカー観てるらしいんだけど、松島とかいう奴が、試合中にいきなりぶっ倒れたらしいぜ」

「えー、あれじゃねえの、さっきバリバリ雷すっげえの落ちたる」

「それだつたりして」

二人は楽しげに話をしている。

「松島は、ここにいんだらうが。男一匹、松島裕司様が」

少女はそういうと、若者の肩をつかんだ。

若者二人はお互いの顔を見合わせた。こいつ狂ってるのかな、そんな露骨な表情であった。

「試合に戻るぞおらあ！」

少女は雄叫びを上げると、先ほど救急車の曲がっていった、スタ

ジাম通用門へ向かって歩き出した。

それはもう、大袈裟なほどのガ二股で。

2

すぎしたたかお

杉下孝夫はバケツの水の残りを花壇にまいてしまうと、モップを手にとって、エントランスへと戻ってきた。

彼はこのマンションの管理人である。

現在、夜の九時。五時で仕事は終了なのだが、今日はマンション管理以外の仕事が非常に忙しかった。やることをやっておかないとどうにも気持ちが悪い性分で、残業代がつかないことを承知で、床の清掃に花壇の世話、ゴミ置場の整理といった最低限のことをしていたのである。

十年前に妻に先立たれて独り身、早くに帰ったところでは一と時間を過ごすだけであるし。

そうこうしているうちにクラブ事務所から、良いとはいえない知らせが入り、自分を落ち着かせるためにますます一生懸命に働いていたところ、すっかりこのような時間になってしまったというわけがある。

ここは、サッカーJリーグに所属しているクラブチームであるズンダマーレ宮城が、選手の寮として使用しているマンション。十年ほど前に親会社が買い上げた、相当に老朽化の進んだ四階建ての建物だ。

数年前に、未曾有の大震災が東北を襲ったが、建物があれに耐え抜いたのは奇跡だと当時住んでいた選手たちは口々にいつていたものである。

杉下が、外からエントランスに入ろうとしていると、ガラス扉の内側に一人の少女がいるのに気が付いた。

インターホンの数字ボタンを押しては待ち、押しては待ち。どうやら片っ端から部屋にかけて中の住人を呼び出そうとしているようである。

杉下はため息をついた。

セールスや、選手の熱狂的なファンがよく使う手だ。

誰かが出たら宅配便のふりかなにかで、内扉を開けて貰おうと考えているのだろう。

ホームで試合をやっているこの時間に、人が出るわけがないのに。何故ならこのマンションはすべて1DKの独身寮。ズンダマーレ宮城の選手しか住んでいないのだから。

「あんだ、なにしとんだ！」

杉下はガラスの外扉を開くと、大股でエントランスへと入りこんだ。

「おう、杉下さん。こんな時間にいるとは思わなかったよ。いやあ助かった、いいところへ来てくだすった。おれの部屋に入りたいんだけどさあ、鍵がなくなってる」

少女は驚いた様子を微塵も見せず、むしろ馴れ馴れしげに話し掛けてきた。

「は、誰の部屋だって？」

杉下は驚いて目をぱちぱちさせた。

人に見つかってしまったって開き直ったのか分からないが、こんな非常識でとんちんかんなことを、こんな堂々といわれたのはこのこの職についてから初めてだ。

「いやだなあ、もう。このもうろくクソじじいがよお。松島裕司の部屋に決まってんじゃーん」

そいうと少女は、杉下の脇腹をつんつくつんつくと両の人差し指で突き始めた。

「あんだ、裕司のファンの子か。……よりもよってこんな時に来なくても。……いま、大変なことになっているというのに」

そもそも、こんなことをするくらいファンのくせに、試合の日程も知らないのか。

杉下はまたため息をついた。

「雷に打たれたって話、本当なの？」

ふざけたような顔をしていた少女であつたが、目の前の老人の言葉に反応し、ずっと真顔に戻った。

「そうかどうかは知らんが、とにかく試合中にいきなり倒れたのは間違いない。それで救急車で運ばれた」

「じゃあ、さつき見た救急車は、それだったのか。……確かに近く歩いてた奴らが、雷で倒れたんじゃねえのなんて話してたけど、でも、でもさあ、おれ、ここにいるじゃんか。倒れて病院に運ばれたのが本当だつてんなら、たぶん、おれ病院から抜け出てきたんだよ。通りで救急車が通るのを見たり、おれのことを話してる奴らと会ったりしてるつてのは、たぶん記憶が混乱して、わけが分からなくなっているだけで、本当は、おれ、救急車に乗っている側だったんだよ。で、いまここにいてことは、きっとその後、病院を抜け出てきたんだ」

杉下に説明しているというよりは、自分自身を納得させようとしているかのようであつた。

「なにをいつているのかさっぱり分からないが、とにかくそれどころじゃないんだよ。こっちは色々と大変なんだよ。さあ、帰った帰った」

実はとつくに今回の件を知つていて発狂してしまったファンかも知れない。そう思うと可哀相な気がしないでもないが、だからといって部外者を選手の住居へ入れるわけにはいかない。

杉下はあえて冷たい態度で、どん、どん、と少女を何回も突き飛ばすと玄関の外へと追い出してしまった。

「くつそ。むかつくな。なに勘違いしてんだよ、ジジイめ。ボケんの早過ぎだろ！ すっかりボケてるつて知つてたら金でも借りておくんだつたよ。おれが病院にいるはずだからつてんで、偽物そっくりさんかと思つたんだろ。違うよ。なんか気付いたら外にいて、試合に戻るうとしたんだけど、追い払われちゃつて全然会場に入れてくれねえんだもん。しょうがねえから、せめて服くらい着替えようと思つてここに来たんじゃねえか。着替くらいしたつていいだろ。」

こんな格好みつともねえっつーの。変態ブルセラオヤジがこっそり楽しんでるところ火事で外に追い出されたみてえじゃねえか。いつまでもこんなん着てられっかよ。逮捕されちまうじゃねえかよ」

「いいから帰れ！」

老人の一喝に少女は、

「もう頼まねえよ、クソジジイが！」

玄関前の階段を思い切り蹴った。革靴が革靴のくせに思いのほかやわらかく、足の指を思い切り打ってしまったようで、苦痛に顔を歪ませた。

涙目で、中指を突き立てると、足元のバッグとカバンを手に取って、ガニ股の大步で選手寮マンションを後にした。

静寂だけが残った。

顔立ちだけみれば非常に清楚でかわいらしい感じだというのに、言動すべてごとくが実に荒々しい少女であった。

杉下は、ふんと鼻を鳴らした。

「口の減らない小生意気なクソガキが」

彼は、自分の言葉にはっとして、目を見開いた。

その言葉は、裕司と軽口をいい合っている時の、自分の口癖だったからだ。

3

選手寮マンションで管理人から冷たく門前払いをくらった少女であるが、彼女はその後、そこからすぐ近くにある児童公園へと来ていた。

節電対策によるほの暗い灯りの下で、ベンチにどっかりと腰を下ろしている。

「ほんと頭くんな！ なに勘違いしてんだか、くそ！」

イライラとした表情で、両手で髪の毛をかき回した。

ふと、横に置いてあるカバンとバッグに視線を向けた。

自分の物ではないが、道で助けた（らしい）女の子にいわれて、

つついっ持ってきてしまったものだ。

少女は、さっきマンション管理人の杉下さんにいった言葉を思い出していた。

道を歩いていて救急車を見たのは自分の記憶違い。自分はその時、乗っている側だったのだから。

では、その時の女の子も幻覚かなにかということになるが、ならばこのカバンはなんだ。

ということは、あれは事実を見ていたのか。

しかしそれならば、あの救急車には、誰が乗っていた？

少女は、また頭をがりがりとかいた。

空を見上げた。

先ほどまでは、どんよりとした分厚い雲が世の中すべてを覆い隠すような、そんな夜空であったが、現在その雲はどこへいったのか、夏の星座が覇権を競い合うプラネタリウムさながらの綺麗な天幕が広がっていた。

しばらく空を見上げていたが、やがて、ゆっくりと視線を下に落とした。

カバンを手にとると、膝の上に載せ、開いた。

誰の物かは知らないが、なにかしらの現状理解の手掛かりになれば、と思ったのだ。

カバン内側にあるネームプレートを見る。ボールペンによる綺麗な手書き文字で、「篠原優衣」と書かれている。

制服のブラウスやスカートの裾をぴらぴらとめくってみる。服にも篠原優衣の文字がないか探そうとしているかのようなのである。

少女は腕を組んだ。

ながーい、ため息をついた。

「なにをやっていたのか、まったく、思い出せん」

いきなり立ち上がると、両手で頭を抱え、絶叫した。

「試合途中に意識が吹っ飛んだらしいことは分かった。とりあえず、分かった。で、おれはそれからなにをやってたんだ。篠原優衣って

奴のカバン奪ったり服剥ぎ取ったりしてたのか？ 変態じゃねえか。つつつか犯罪じゃねえか。おれ、実は二重人格の変態野郎なのかな。つつかさあ、試合中に倒れたとしてもだぞ、なんでこんなところにいるんだよ。こんなところつかスタジアムの外にいたんだよ。おれ、みんなにゴミのように捨てられたのかよ。冗談じゃねえぞ、くそつたれ！ ……とにかく、なんか…住所か、なんか、書かれてないかな」

少女はひとしきり吠えたとベンチに座り直し、カバンとバッグの中にある物を調べはじめた。

自分の記憶にない以上は他人様の物なのであるが、とにかく、この持ち物からなにかしらの手掛かりが見つかるかも知れない。住所でも書いてあれば、寮のお隣りさんの人あったり、なにかが分かるかも知れない。隣のおばさん急用で娘のをちよつと預かっただけみたいな。

でも意味が分かんねえよな、それも。なんでそんなもん預かる必要がある。仮にそうだとして、おれがスタジアムからも寮からも追いつかれることと、なんの関係がある。

と、疑問を感じたものの、それでも他に考えつくこともない。少女は所持品から身元を確認出来る物を探し続ける。だがしかし「篠原優衣」という名前以外は何ひとつとして分からなかった。あとはせいぜい、教科書が高校二年生用であるということくらい。

また腕を組んだ。

静かに息を吸い、静かに吐いた。

落ち着こうとしたのだが、どうしても落ち着くことが出来ず、結局また、奇声を発しながら頭をがりがりぼりぼりとかいた。

「しかしなんだか、長い髪の毛がうつとうしいんだよなさっきから、くそ！

頭を掻くのをやめ、はつとしたように顔を上げた。

長い……髪の毛？

なんで、こんな髪の毛伸びてんだ？

しかもさらさら。

なんだか、ふんわりしているし。

「……そしてそして……なんだかき、ちっこくなってねえか、おれ」
視界が、高さが、どうやら変化していることに、いま気が付いた。
少なくとも、これは身長百八十センチの視界ではない。なんだか、
二十センチ以上も背が小さくなったような気がする。

少女は頭をなで、自分の背中に両腕をまわしてぎゅっと抱きしめ、
そして自分の手を、指を、まじまじと見つめた。手のひらを、甲を、
指を曲げて、伸ばした。少し伸びた整った爪、細い指。毛も生えて
ねえ。

ぞわつと鳥肌が立った。

「なんだ、この女みてえな手！」

叫び、立ち上がると、なにかに打ち震えるような呻き声を上げながら公園の外れにあるトイレへと向かった。

ほのかな街灯に照らされた薄暗い中を、素早くきよるきよる見回して、辺りに誰もいないことを改めて確認すると、さっと入り込んだ。

男子トイレへと。

ちかちかと、切れかかった蛍光灯の下で、おびただしい数の小さな虫や蛾が飛び交っている。気持ち悪いが、しかしそんなことを気にしている場合ではない。洗面所の鏡の前に立ち、そこに映る自分の姿を、おそろおそろ見てみた。

鏡の中に映ったその顔の、血の気がさつと引いたのが見えた。

誰、こいつ……

疑問を確かめるために鏡の前に立ってみたわけだが、しかし、自分が自分であることはまったく疑ってもいなかった。だが、いま目の前の鏡にうつっているのは、自分の知っている自分とは、まるで違うもの、というよりも、そもそも自分ではなかったのである。

痩せた太った老いた若返ったでは説明のつかない、全くの別人の顔。

しかも……

それは、女の顔であつた。

年齢は十五、六歳くらいであろうか。大人に近付きつつも、まだ多分にあどけないところを残した、かわいらしい顔立ちの少女が、鏡の中に立っていた。

咄嗟に後ろを振り向た。背後に誰かが立っていて、鏡に映り込んでいるだけかも知れないと思ったからだ。

だが後ろには、誰もいなかった。

外に人のいる気配もない。

ということは……

「うそ」

少女は、そつと手を伸ばし、鏡に触れた。

そして、ゆつくりと、戻した手を自分の顔へと持っていく、なでた。

ついで、胸に手をやった。

それは確かな、感触であつた。

スカートをまくりあげ、下着の中に手を入れてみる。

ない……というか、違うものが……

鏡の中の少女の顔が、再びさつと青ざめた。

ごくり、と唾を飲んだ。

そして、

うぎゃああああああ、と、まるで漫画の断末魔のシーンのような、そんな少女の絶叫が、夜の児童公園、そして近所に、不気味に響き渡った。

4

「だから何度もいつてんだろが！ 運ばれてきたサッカー選手の松島裕司ってのはおれなんだよ！ 友岡さんが、誰でもいいからここに呼んでくれよ。お前らじゃ話にならねえ！」

松島裕司を名乗る、学校の女子制服を着た少女は、その柔らかな

顔立ちに似合わぬ荒い声を張り上げて、全身からバリバリと怒りのオーラを放出させている。

「運ばれたのおれなんだよ、って君はそこにいるじゃないか」

「さっきからほんとしつこいね君も。もう出ていけよ。警察を呼ぶぞ」

二人の警備員が、かわるがわるに口を開く。淡々とした口調ではあるが、内心、怒りを抑えているような様子が表情から分かる。

先ほどからずっと、このような問答が続き、彼等もなるべく感情をぐっと抑えて、やんわりと追い返そうとしていたのだが、

「ブレイクスルー！」

少女がいきなり二人の間に肩から突っ込んで、強行突破を図ろうとしてきたため、一人が腕を掴んで強くねじり上げた。

捻られ、少女は短く悲鳴を漏らした。

「精神科にでも行け！」

突然の珍客との埒のあかないやりとり、いい加減にイライラが集ってきていたのが、ついに爆発してしまったようだ。相手がことさら非力そうに見える少女であるというのに、容赦なくどんと強く突き飛ばした。

少女は、倒れそうになるのを足を踏ん張って堪えると、

「じゃあ、ここに入れるよ。ここ病院だろ！」

そう。ここは石巻大津賀病院。駅から海に向かった突き当たりにある大きな総合病院だ。

少女は、松島裕司が救急搬送されたのであればここしかないと考え、やってきたのである。

到着するや正面駐車場にクラブスタッフの自動車が停まっているのを見つけ、その確信を得た。

夜間で正面口が閉まっているため、裏口に回り込み、受付に松島裕司のことを尋ねたところ、教える、教えられない、つれてけ、出来ないと押し問答になり、あぐくのはてには警備員を呼ばれて、このように追い出されてしまったというわけである。

病院側としても、どう考えても赤の他人である少女を、瀕死の患者に合わせられるはずもない。常識として、それは理解出来る。

だが、少女としても必死であった。

「だっておれが、松島裕司なんだもん」

何故だか理由は分からないが、とにかく心が、この少女の肉体へと入ってしまったようなのである。どんな科学的事象なのか、心霊現象なのかは、知る由もないが。

本当の自分の肉体に会えば、状況が分かるかも知れない、状況を変えられるかも知れない。

と、そう思っただけで来たのである。ちょっと邪険に追い払われた程度で諦めるわけにはいかなかった。

外へと突き飛ばされた少女は、懲りずにまた強行突破で中に入ろうとする。

また、警備員に腕を掴まれた。また、外へと追い出された。今度は遠心力でぶんと振られて吹っ飛び、地面に転がった。

「畜生。なんなんだよ、この貧弱な身体は！」

女の平均的な腕力など知らないが、とにかくこの身体の腕力の無さを呪うと、警備員を睨みつけ、そして舌打ちをした。

少女は警備員に向かって凄まじく卑猥な捨て台詞と唾を吐き捨てると、自分の尻をべしべしと叩いて、この場を立ち去った。

病院の中に入ることを、本当の自分に会うことを諦めたわけではない。

じっくり作戦を練ろうと、病院の周囲を回り始めただけである。

最悪、どこかの部屋の窓ガラスをぶち破って入り込んでもいい。

警察呼ばれるかも知れないが、自分がもとの肉体に戻れば、単にこいつが捕まるだけの話だ。ちょっとかわいそうな気がしなくもないが、まだ十代なのだろうし、たいした罪には問われないだろう。少年法というのは、少年少女に思う存分に罪を犯すことを堪能してもらっただけに存在しているのだから。

病院の正面口へと戻ってきたが、先ほどまでのしんとした様子と

がらりと違つて、非常に騒々しい。

何台か、テレビ局のものと思われるバンが停まっている。

そして、カメラマンやリポーターと思われる者たち。

一人の女性リポーターが病院の建物を背景に、深刻そうな顔をカメラに向けている。

「はい。搬送された時点で心肺停止状態とのことで、現在集中治療室にて……あ、ちょっと待って下さい。……ええ、ただいま新しい情報が入りました。松下裕司選手の……死亡が確認されたということです」

女性リポーターは、囁くように、でもはつきりと、そういった。どさり、

地面に、バッグが落ちた。

近くに立つて聞いていた少女の手から、落ちたのだ。

少女は、呆然と立ち尽くしていた。

指先が、唇が、全身が、震えていた。

「どういう、ことだよ……」

ぼそ、と呟いた。

「どういうことだよ、それ！」

同じ言葉を今度は怒鳴り、女性リポーターへと駆け寄ると、その両肩につかみ掛かろうとした。

瞬時に数人のスタッフに取り押さえられ、引きはがされてしまう。

「じゃあ、おれはなんなんだよ！ 松島裕司はここにいるぞ！ 死んでなんかいねえ！ 松島裕司はここにいるぞ！」

羽交い締めになれ、逃れようと懸命にあがきながら、少女は叫んでいた。

5

いったい、なにがなんなのか。

自分の身に、なにが起きたのか。

相変わらず、さっぱりだ。

とりあえず事実らしいと分かっていることは、松島裕司が死んだということ（まだ半信半疑ではあるが）。

その松島裕司は、おれであるということ。

そのおれの心だけが、何故だか見ず知らずの女子高生の肉体に入り込んでしまったらしいこと。

それだけだ。

このような境遇になり、なおかつ判明していることがそれしかないというどうしようもない状況であったが、しかし、ひとしきり取り乱した後の現在、自分でも驚くくらいに落ち着いた精神状態になっていた。

もちろんこれからどうなるのかという不安はあるが、少なくとも興奮状態にもなれば、それほど悲観して落ち込んでいるわけでもなかった。

もともと前向きな性格というのもあるが、すっかり感覚が麻痺してしまつたところがなによりも大きいのかも知れない。

不思議なことに、自分が死んでしまったのだという実感も、悲しみも、あまりなかった。

でもそれは当然かも知れない。

通常、死んだことへの悲しみというのは他者しか持ちようのない感情であるのだから。

それに、どんな神様だか悪魔だかの計らいかは知らないが、自分はこの少女の肉体に入り込んで、物を見、歩き、呼吸をしている。死んだ実感などわきようがない。

かてて加えていうならば、松島裕司の死体をまだ見ていない。悲しむ肉親の姿もまだ見ていない。

実感がないから信じないというわけではない。これが現実なのだろうなとは思っている。

その上で、不安を感じつつも半ばそれを受け止めてしまつていてどこか達観した自分がある、ということである。

さて、松島裕司の入り込んだ、少女のこの身体、現在、夜の繁華

街を歩いている。

果然とわけも分からぬままに漂ってきたわけではなく、確固とした目的を持って、ここへと来ていた。

とりあえず自分に起きた不可思議な現象を事実として認めるとして、そうなる大事なのが生活基盤の確保、まずなによりも先に、飯を食ったり雨風をしのぐ場所を探さなければならない。てつとり早いのが、この身体の持ち主の家に行くことである。そこには当然ながら完全な、自分に適した生活基盤が用意されているはずなのだから。

石巻は、仙台などとは比較するのもおこがましいくらい格段に田舎だが、しかし繁華街ともなれば、コンビニやカラオケ店の前には中高生がうろろとしてゐる。みんなヤンキーやギャルみたいであるが、この際しかたがない。少女はそんな通行人へと歩み寄り、声をかけた。

「ねえ、ちよつとそこのお二方、この制服さあ、どこの学校のか知ってる？　ね、お姉ちゃん！」

少女は、目の前を通り過ぎようとしている制服姿の色黒ルーズソックスと腰パン男子のカップルを、服の裾を両手で引っ張って立ち止まらせると、自分の着ているグレーのベストを両手でぴらぴらと引っ張ってみせた。

通う学校を知ったところで意味がない気もするが、とにかくこの身体の持ち主の家に行こうにも、手がかりがないのだから仕方がない。自分の着ているのと同じ制服を探せば一番なのだけど、お嬢様校なのか何だか知らないがどこにも見当たらなかったから。

この身体の身元がはっきり分からなくても、篠原優衣という名前だけは分かっているの、最悪、それを頼り警察で確認してもらおうと考えている。

だが、この身体が篠原優衣である確証はないし、そもそも自分の家も家族構成もなにも分からないままに警察に行ったところで、完全に疑われてより面倒なことになるだけだ。この身体は実は篠原優

衣などではなく、盗癖があつて本当の篠原優衣からカバンを盗んだのかも知れないし。そう考えると、やはり警察に行くのは最後の手段にしておきたい。

「うわ、なにこいつヘン！……聖亜女学院の制服だろ、それ」

色黒ルーズソックスは、気持ちの悪いものでも見るような表情で一步身を後ろに退いて、少女の手を振りほどいた。

「セーア女学院ってんだ。分かった。ありがとね」

少女は礼をいったが、しかし二人は無視し、脳の病気が空気感染する前にと、そそくさと去ってしまった。

「なんちゃってじゃないの？　なんかおっさんみたい」

「いや、逆に中学生だろ、あれ」

二人の大きなひそひそ声が聞こえてくる。ひそひその意味がまるでない。

「この顔、そんなガキみたいなのかな？　十代なんざみんなガキだから、中学も高校も区別なんかつかねえや。本当に中学生だったにしてな。お姉ちゃんの制服着たりしてさ。しかしあいつら、教えてくれたのはありがてえけど、女が夜遅くにこんなところ歩いてんじゃねえっつーの。男連れだからって、不良どもめ」

ぶつぶつ呟く少女。思ったことがあると、いちいち口に出さないと気が済まない性格のようである。

こんなところを歩いていると思えばこそ、こんなところまで来たくせに。

ともかく一步前進だ。自分の着ているこの制服の、学校の名前は分かった。後は、この身体が篠原優衣かどうかを確認すればいい。もしそうであるなら、電話番号をど忘れしたと嘘でもついて、家の番号を聞けばいい。

駅へと戻ると、周辺地図で聖亜女学院の場所を調べた。

ここから一駅のところにある学校だ。

ちょうど、というか通っているならば当然だが、そこまでの定期券がカバンの中に入っている。

時刻表を確認する。なにせ田舎、電車が一時間に一本しか来ないし、頑張れば歩けない距離でもないの、あまりに待つようならば歩いてしまってもよい。でも、タイミングよくあと五分ほどで来るようだ。

改札を通り抜け、ホームに立った。

まばらに、電車を待つ人が立っている。

少女は改めて、自分の服装を見て、なんだか恥ずかしい気持ちになつた。

設置された鏡を見てみると、やはりさつきトイレで見た、あの少女の顔だ。

だから他人の目からすれば、特に奇異に感じることもないのだろうが、だからといってこの気持ち悪さが解消されるものでもなかった。

数分ほど待つと、アナウンスが流れ、かたなかたんと音をたててゆっくり電車が入ってきた。

目の前を車両が通過していく際の風で、揺れるスカートがそよそよと足を刺激、気持ち悪さに鳥肌が立った。どの程度の風でめくれ上がってしまうものか分からず不安で、手で押さえつけてみるが、この程度なら放っておいても問題なかったようだ。

しかしこのスカートって奴、なんだか頼りなくて不安で、みつともなく思えてしょうがない。なんで女は、こんなので平気なんだ。服じゃねえぞ、単なる布だぞ、パンツの上から、腰に布巻いただけだぞ。変態だろ、女って。

などと頭の中だか小声だかで呟きながら、電車に乗り込むと、陸前山下駅へと向かった。

石巻から、三分で到着だ。

駅を出、そこからは徒歩で、線路沿いを石巻に戻るように七分、特に迷うことなく聖亜女学院の高等部に到着した。

さて、ここからだ、と気を引き締めなおした少女であったが、しかし自身の身元確認は拍子抜けするくらいあっけなく終了すること

になった。

「ねえおっさん、この顔知らない？ ここの生徒らしいんだけど、多分」

少女は、ちょうど校門から出て来たメガネの中年男性に話し掛け、自分の顔を指でさした。

「篠原、こんな遅い時間に、こんなとこでなにやってるんだ」

メガネの中年男性は、びっくりしたような怒ったような表情で、少女の顔を見ていた。

「お、いま篠原っていったね。やっぱりこいつ、篠原優衣って奴なんだ。おっさん、ここの先生？」

「お前の担任だろうが！ だいたいなんだその言葉遣いは！ なんの冗談だ！ からかうのもいい加減にしろ！」

6

「うまい！」

東北ローカルのお笑い芸人がグルメリポーターになって、仙台市内ラーメン店のラーメンを大袈裟な身振り手振り、挙げ句の果てには床を転げ回って絶賛している。

テレビ番組、昼のワイドショーである。

ここは、篠原優衣の自宅。

彼女はこの家で、父親と二人で暮らしている。

父親は仕事で出掛けているため、現在この家には優衣一人だけだ。優衣の服装は、学校の青いジャージ姿。

硬いソファの上で、あぐらをかいて座っている。

両腕を伸ばして大きなあくびをすると、背もたれに完全に重心を預けた。

だらーん、と全身の力を抜いたかと思うと、ため息をついた。

昨夜は、あれからが実に大変だった。

自分の通っているらしい学校の校門にて、担任教師と出会った優衣であったが、それがあまりにも夜遅い時間だったものだから、親

が呼び出されることになった。問題行動というほどの認識ではないが、実際、帰路が危険だからである。

親の到着を待つ間、優衣は先生から次のような話を聞かされた。ほんの数時間前のことらしいが、居眠り運転のトラックに、あわや幼い女の子がひかれかけた。それを聖亜女学院の制服を着た生徒が助けたらしい、ということ。

女の子を突き飛ばして事故から救ったその瞬間に、大きな雷鳴、その聖亜女学院の制服を着た女生徒は真っ白な光に飲み込まれた。目が潰れてしまいそうなほどのあまりに強烈な光に、女生徒がどうなったのか見ていた誰にも分からなかったが、少しして自力で立ち上がったことから雷はすぐ近くに落ちただけだったのだろう。

その、女学院の生徒は、特になにこともないようにその場を立ち去った。

トラックの運転手が警察に事故の届けをし、女の子の両親とともに調査を受け、そこで話したことが、学校に伝わってきたのである。いま優衣を見ていると、その女生徒の外観説明となんだか似ている、ということ、その話を持ち出してきたのだ。

その話を聞いて、理解出来た。

偶然なのかどうか分からないが近場で同時発生した落雷によって、二人が入れ代わってしまったのだ。そして、打たれどころが悪かったのか松島裕司の肉体は死に、それより遥かに生命力の弱そうな篠原優衣の肉体が生き残ったのだろう。漫画などではどちらも生きていて単純に二人が入れ代わるだけのパターンがお決まりであるが、現実には漫画ではない。

「それ、おれだ」

優衣は担任に、そう正直に答えていた。

その話を聞いている最中は、面倒になるから絶対に自分のことだとばれないようにしようと思っていたのだが、「お前のその妙ちくりんな態度も、雷に打たれたんじゃないのか」などと先生に嫌味をいわれたことで、その方がなにかと都合なことに気がついたので

ある。

そういうことにしておけば、気がねなく篠原優衣の家で休める。なにを聞かれても、記憶にありませんで済む。

しかし、よくよく考えてみるまでもなく当然のことだったのであるが、脳に異常がないかどうか、迎えにきた父親の自動車でそのまま病院へ連れて行かれることになってしまった。

石巻大津賀病院、あの、松島裕司が搬送され、死亡が確認された（と思われる）救急病院である。

そこで優衣は、軽い診断を受けた。

記憶や態度に異常があるのは、落雷のショックか地面に倒れたことによる脳震盪か、いずれにせよ一時的な記憶障害であろう。外傷はない。正常に受け答えは出来ているし、生命に別状はないようだから、今日はもう帰って、明日改めて専門医による診察を受けるように。そういうわれ、ようやく篠原優衣の自宅とやらの帰ったのであるが、既に深夜であつた。

知らない家に、知らない人間（父親）と二人きりという状況であつたが、松島祐司としてはさしてそういうことを気にしない性格であつたし、心身ともにすっかり疲れて切っていたのか、着替えを済ませてベッドに横たわるとすぐに眠ってしまった。

そして今日は朝から、CTなどの精密検査、図形記憶やその他の反応検査などをやらされ、何故だか血まで採られて、つい先ほどの家に戻ってきたばかりである。

なお、病院には自分が松島裕司であることは黙っていた。藪蛇になりそうだからだ。冷静に考えれば、医者に相談して解決する問題ではないし、下手をしたら入院隔離だ。

現在、この家には優衣一人きり。

父親は朝、優衣を自動車で病院まで送ると、そのまま職場へと向かった。

その際に、大事をとって今日は学校を休めといわれている。そういわれたことは、本当に有難かつた。

この身体に入り込んだままでどうにもならない以上は優衣として生活するしかないわけで、だから学校にも行かなければならないのかなとは思っている。自暴自棄になって好きなことばかりしていても、この娘がかわいそうだし。

とはいえ、まだ何がなんだかさっぱり分からない状態で、さらに学校になどいったら、ますます頭が混乱してしまう。

せめて今日一日か二日くらいは、ゆっくりと考える時間が欲しいから。

でも本当は学校なんか永遠に行きたくないけど。勉強、大嫌いだ。テーブルの上にはスポーツ新聞が置かれている。病院の帰りに購入したものだ。サッカー欄には、非常に小さくではあるが、松島裕司の死亡記事が掲載されている。

改めて実感がわくかなと思って入手してみたのであるが、読む前の精神状態と比べて別段、変化は感じなかった。扱いのあまりの小ささに、ちよつとムツときた程度である。

ただ、実感こそはないけれども、松島裕司が死んだということは、まあ事実なのだろうなと受け止めている。その受け止めが、記事を読んだことでほんの一步進んだ感じた。

受け止めてはいるが、死そのものに関しては、あまり淋しい悲しいといった感情はない。それよりも、もうあの仲間たちとサッカーが出来ないということのほうが、しみじみと淋しかった。

唐突ではあるが、ここで執筆描写上の約束事を決めておきたい。肉体は篠原優衣、しかし魂は松島裕司、つまり思考はすべて松島裕司のものであるはずだが、しかし言動思考とも基本すべてを「優衣は」「彼女は」と表現するようにしたい。言動部分が「優衣は」、思考部分が「松島は」と、むしろ文章理解や情景想像の上で混乱が生じるからである。「松島裕司はボールを蹴った」これで誰が、少女の身体がボールを蹴っているところを思い浮かべられるか、ということである。

さて、話を進めよう。

ソファにあぐらをかき、柿ピーナツをぼりぼりとつまみながら延々とニュースやワイドショーを見ている優衣であるが、しかし、ちつとも松島裕司のことを取り上げないことに、いい加減イライラしてきていた。

どうなっているんだ。近頃のテレビ局は。股間の緩いバカ芸能人のデキ婚話題の方が大事だったのか。

「お」

優衣は、身を乗り出した。

「リーガー、落雷で死亡？　なんだかみっともないテロップだが、とにかくおれのことだ。」

「いよつ、待ってました！」

優衣は両手をばっしばっしと叩きながら、なんだかやけくそ気味に叫んだ。

男らしい野太い声を出したいのだが、どうしても女の子のような高いかわいらしい声しか出てこない。身体が女の子だから当然なのだが。

公園のトイレで鏡を見て、それで初めて自分に起こった異変に気付いた優衣であるが、そもそもどうして自分の発する声質の違いですぐに気が付かなかったのだろう、と我ながらこの鈍感さには呆れてしまう。いやいや、きつと松島裕司が問題なのではなく、こいつだ、この小娘の脳みそは、アホなのだ。

中に干からびた物が入ってやしないかと、ちよつと頭を振ってみたが、特にカラカラ音もしなかった。

テレビのワイドショーであるが、松島裕司を襲った事故について、スタジオムの映像がちょつとだけ映ったかと思うと、すぐにスタジオ内の映像に戻り、アナウンサーがちょろつちよろつと記事を読み、

「さあて、次のコーナー、あなたのお家のおすすめレシピです」
ちよつと沈んだような態度も一瞬でどこへやら、なにか悲しいことでもあったんですかといわんばかりの、抜けるようなほがらかな

表情で、次へと移ってしまった。

優衣はムンクの叫びの手つきで、むぎょおおおお、と雄叫びと
いうか奇声を発すると、柿ピーナツをひとつかみにして口の中に詰
め込んだ。バリバリ噛み砕きながら、

「なんだよ、この扱いの酷さ！ 飯にもミスター宮城だぞ、てめえ。
畜生。ボケ。バカ。くそう、このチャネル二度と見ねえ。取材が
きても断る！ もうテレビどうでもいいや」

残りの柿ピーナツを部屋中にぶちまけたい衝動をぐっところえて
テレビの電源を消すと、ばりばり頭をかき尻をかきながら、階段を
のぼって二階の自室へ向かった。

六畳の洋室。

いまだきの女子高生にしては、実に物の少ない簡素な部屋である。
かといって男っぽい部屋というわけでもない。女性らしくはあるも
のの、とにかく生活感というものがほとんどないのである。生活感
も、趣味性も、まるで感じられないのである。

ぱっと見に目に入るのが勉強机とベッドと洋服箆笥だけ。余計な
ものがまるでない。

この部屋をこうして落ち着いてじっくりと見たのは、いまが初め
てである。

昨夜はまだ気が動揺していたうえに、深夜の通院ですっかり疲れ
てしまっていた。だから動揺していたわりには着替えてベッドに横
になるなり、ぐっすりと寝入ってしまったのだ。朝、目が覚めたら、
またすぐに病院だったし。

「お」

優衣は、ベッドと洋服箆笥との間に、サッカーボールが転がって
いるのを発見した。サイン用や子供用ではない、一般的な試合に使
う五号球だ。

ちよつとだけほつとした。あまりにも部屋が、ロボット執事でも
住んでいるのかというくらいに無味乾燥としていたから。

しかし、まさかここで、こんなものを見るとは。

ボールだけではない。洋服筆笥の上に、サッカーか何かのユニフォームらしいものが綺麗にたたまれている。

手に取り、広げてみた。

オレンジ色のユニフォーム。「17」と背番号が大きくプリントされており、その下には「YUI」の文字。

「ワイ、ユー、アイ、スポンサーの名前かな。とにかくこれって、サッカーの、ユニフォーム、だよな」

優衣は手にしたユニフォームを無造作に丸めて筆笥の上に戻すと、しばし腕を組んで考え込んでいたが、やがて、なにかを思い付いたように、部屋を出た。階段を駆け降り、さっきまでテレビを見ていた一階のリビングへ。

テーブルの上には、新聞と、危うく中身をぶちまける寸前だった柿ピーナツと、優衣の父親の物と思われるノートパソコンが置かれている。

優衣はパソコンの電源を入れ、ブラウザソフトを起動させ、ポータルサイトに表示されている日付やニュース見出しの内容からネット回線が問題なく繋がっていることを確認すると、検索窓に「篠原優衣」の四文字を入れてみた。

パソコン操作が異常なほどにぎこちなく、打ち間違っでは修正し、入力と変換だけで三、四分ほどかかったが、とにかく検索に成功。ずらずらずらずらと、サッカーの国際大会の名称や、代表選出のお知らせなどの情報がびっしりだ。

聖亜女学院在学中

個人の応援サイトに、そう書かれているのを見つけた。

間違いない……

「こいつも、サッカーやってんだ」

優衣は、まるで他人事のように呟いていた。心が松島裕司なので、他人事なのは当然であるが。

どうやら篠原優衣は、U12の頃から世代別代表の常連のようだ。「エリートかよ、くそ、すげえな。ああ、なんかコミの野郎を思い

出した。むかつく」

でも、こんな軟弱そうな身体にくせに、そんなに凄いだろつか。こいつ。

改めて自分の、この身体付きを見てみた。

腕なんかほんと細くて小学生よりも弱そうだ。

太股に両手を回してみる。サッカーをやっているだけあって、こは多少は締まっているようだが。

「つつか女でサッカーやってる奴なんて、ほんとにいるんだな。なんだっけ、何年か前になんかで優勝してすっげえ騒がれたよな。なびすこジャパンだかなんだか。……へえ、どこでサッカーやってんだろ。なんかのクラブに入ってるのかな、それとも学校のサッカー部かな」

サッカー繋がりをちよつとだけ嬉しく思いながら、またぎこちない手つきでパソコンのキーを叩きはじめた。

7

どんよりと湿った暗い空気が、隅の隅まで完全に満ちていた。

でもそれは当然といえば当然であった。

この大きな部屋の中にいる男女はみな黒い上下に身を包んだ正装をしている。つまりは、喪服姿であるからだ。

ここは、石巻市の湾岸にある葬儀場。震災で壊滅状態になった跡地を買い上げて建設された、新しい建物だ。

しかし、場内を見回してみると、このような肅々たる場にしては、男性の茶髪率が異様に高い。

そして、そんな茶髪の彼等は一様にみな、がっちりとした筋肉質、一見痩せているようにも見えるのだが、よく見ると内側から筋肉でスーツがぐつと押し上げられているのが分かる。

場内では、ところどころで泣き声を上げている者がいる。

涙目になって、上を向いて、こぼれるのをぐつとこらえている者もいる。

先日の試合中に倒れてそのまま帰らぬ人となった、ズンダマーレ宮城所属のサッカー選手、松島祐司の告別式である。

松島裕司がこのチーム一筋だったこともあり、茶髪筋肉質の男性たちはほとんどがズンダマーレ宮城に所属、または所属していたことのある選手、元選手であるが、一人だけ、関係のないチームの選手が来ていた。

「バカじゃねえのか、いきなり勝手に死にやがってよ。お前、ほんとにふざけんじゃねえぞ、最後の最後まで。……畜生」

松島祐司が死ぬことになった落雷事故が起きた際の対戦相手、オミヤンパス岡崎に所属している小宮山だ。彼は松島とは小学校の頃の同級生である。

棺の小扉から松島裕司の、もう永遠にぴくりとも動くことのない顔を、見下ろしている。

彼のその目には、うつすらとであるが涙が浮かんでいる。

「ほんとに、バカじゃねえのか……」

そう繰り返すと、かすかに震える手で扉を閉めた。

踵を返し、棺に背を向けた。

松島の両親にお辞儀をすると、背筋をぴつと伸ばし、出棺を待たずにここを立ち去った。

ここに来ているのは関係者だけではない。取り巻くようにして、ファンたちも大勢参列している。

通常は関係者が終わってから一般参列希望者を通すものであるが、宮城には全国的に有名な選手はおらず、混乱するほどの人間が来ることはないだろうということで、同時参列を許可されている。

その一般参列者の中にはズンダマーレ宮城のユニフォームを着ている者もいる。遺族の中には、なんだあれはと眉をひそめる者もいるが、これは彼らなりの正装なのである。

また、この中には、篠原優衣の姿もあった。

学校以外では珍しく、黒のスカートをはいている。

すかさずかして、なんだか何もないみたいで気持ちが悪

くて仕方ないのだが、他にこういう場に相応しい服が見つからずに我慢しているのだ。

でもまあ、ここへ来てよかった。

優衣の中にいる松島裕司は、心から、そう思っていた。

死んでしまったことを、よりはつきりと現実として受け止めることが出来たからだ。

家で悲しんでいたって、事実は変わらないのだから。

切り替えた。

試合でみつともない負け方をするたびに仲間に、そして自分の胸に叩き込んできた言葉を、改めて心の中で呟いた。

自分の前途になにが待っているのかなど分らないが、そんなの誰だって同じだし、とにかく前進するしかないのだから。

進めばきつと、なにか良いことがあるだろう。

人生そんなもんだ。

蚤の糞ほどの根拠もないくせに、でもそう確信していた。

それと、

「ありがとな、コミ」

優衣はそう呟いていた。

常に悪口ばかりいい合ってきた小宮山が、今日、この場へ来てくれた。

素直に、嬉しかった。

大きな大きな体躯を屈ませてめそめそしている宮城の選手を見つけた優衣は、彼へと近付いた。大きく背伸びをし、その巨大な背中を強く叩いた。

「おい柴岡、次に宮城を引つ張ってくのはお前だかな。おれ、前々からずっと期待してたんだから。毎日いじめてたけどさあ」

まあそれも愛情の裏返しだ。

「はい、頑張ります松さん！　って、あれ？」

相手が小柄でかわいらしい少女であることを認識していながらも、つつい松島と思い込んで力強く拳を握り締めた柴岡選手は、なん

だか分からずきょとした表情で小首をかしげた。

「あの、こういう場なんで、フアンの方は選手に話し掛けるのご遠慮いただけますか」

クラブの社員である吉岡さんが、優衣に近寄ると、耳元で囁いた。声は小さいけれど、はっきりと怒っているのが分かる。

「あ、ごめんごめんヒデちゃん」

優衣は頭をかき、吉岡さんの背中を叩くと、一般参列者の群れに戻った。

吉岡秀雄は、びつくりしたような表情を浮かべていた。まず表に出ることのない自分の名をこの少女が何故知っているのだろ。広報ならともかく、単なる裏方の一社員だというのに。

さて、もうじき出棺の時間であるが、優衣はそこまで見届けずに会場をあとにした。

自分の肉体が、もうすぐなくなってしまうというのに、それほどの未練は感じていなかった。

肉体なんて単なる器。おれはいまここにいる。それと、おれを知っているみんなの心の中に。

これまで二十九年付き合ってきたその器に対して、これまでよく頑張ったななどという感傷の気持ちもさほどわかなかった。だって頑張ったのは結局自分だもの。

外へと出た優衣は、なんだかすっきりとした表情、梅雨の晴れ間の日の光を浴びて眩しそうに目を細めると、大きく伸びをした。

これからのことに、不安が微塵もないわけではない。だからこそ、物事を単純に割り切って、現実的に受け止め、良い方へ考えるようにしているのだ。

悩むことで肉体が甦り、肉体に戻るものならば、いくらでもそうするところだが、そんなわけにはいかず、ならば考えても仕方がない。

しかし、人間の感情というのは実に不思議なもので、改めて割り切り、納得し、すっきりした気分になったと思ったら、途端にどつと

涙が出た。

優衣は、全身の力が抜けたように、道端にしゃがみ込んでしまった。

誰だよ、会場出たのにまだめそめそ泣いてる声が聞こえるよ、な
どと思っていたら、泣き声を上げているのは自分だった。

「みつともねえな。男が泣くなよ！」

自分を叱咤するが、でも、どうしても涙が止まらなかった。

嗚咽がおさまらなかった。

「おーおー我らーと共にありー、まつしまアゆーじー」

ユニフォーム姿の小太りメガネの中年サポーターたちが、だんご
のように固まって、涙声で、松島の応援歌を張り上げながら歩いて
来た。なんだか酔っ払っているようにしか見えないが、まあ悲しい
のだろう。

出棺も終わって、彼らも会場をあとにしてきたようである。

「みやぎいの、勇姿」

優衣は、自分の泣いているのをごまかそうと、彼等に合わせて歌
いながら、その輪の中に入り混んだ。

「同士！」

女に縁のなさそうな男たちが予期せぬシチュエーションに興奮し
たのか、一人が優衣に抱き着くと、残りもいつせいに密着してきた。
優衣は、ぎゃあと悲鳴を上げた。

「おれのファンなのはありがたいが、そういうのはちょっと。つ
うかふざけんてめえら。くっ付くな。……呼吸が」

肉だんごに圧迫されてもみくちやにされる優衣。全身に鳥肌を立
たせながらも、懸命に押し返そうとしたが、しかしだんだんと意識
が遠退いていく。

おれがさらに死んだら、どうなるのだろうか……

第三章 きらきら……？

1

野本茜はタイミングよく足を伸ばし、ボールを奪い取った。

すぐさま横へとドリブルしてパスコースを作り出し、前線で上手くマークを外した西田久子へとパスを出そうとする。だが、蹴ろうとしたその瞬間、すっと突き出てきた久木成美の足に引っ掛かって転んでしまった。

「茜、判断遅いからだよ！」

榎戸朱美コーチの怒鳴り声が飛ぶ。彼女は元なでしこジャパンで、現在トップのコーチと下部組織の監督を兼任している。その厳しさから、ついたあだ名は鬼軍曹。

「はい！」

茜は片膝に手をついて起き上がると、急いで走り出し、守備へと戻る。

しかしもう間に合わず、FWの徳山神末にシュートまで持ち込まれてしまっていた。

だがCBの谷保絹江がしっかり身体を寄せて、コースを限定させている。

シュートこそ弾丸のように勢いがあつたが、タイミングが正直なのと打てるコースが限られているため、GKの楠元友子くすもとともこが、がつちりとキャッチ。胸に抱え込んだ。

「トモ！ お前、もうちょっと腰落とせ！ FWがもっと上手けりや、もっと際どいところにだって飛んでくるぞ。対応出来るようにしとけ！」

たかはすのりあ

高蓮範男GKコーチの指示が飛ぶ。彼は現役時代はやらかし系、ネタ提供係などとファンからかわれ、また、親しまれていた存在であったが、Jリーグチームのコーチを経て、現在では立派な女子サッカーの指導者として活躍している。

「はい！」

楠元友子は元気よく返事をする、ボールへと助走をつけ、強く蹴った。

しかし、見事なまでの蹴りそこね。ラグビーボールではあるまいし何故そのような方向に飛ぶものか、ほとんど真横に飛んで、タッチラインを割ってしまった。

「バカー」

高蓮コーチの、ドスのきいた低音ながらどこなくなよつとしたような独特の大声が轟いた。

友子は非常に好調不調の波が激しいGKである。ノッているときは、そこそこ精度の高いボールを蹴るし、素晴らしいセーブだって見せる。しかし調子が悪い時は、いま見せたように、キックがどこに飛ぶか分からない。楽々キャッチング出来るところを、落としてしまったりする。どう考えても飛び出すべきところを躊躇して、やられてしまう。

一言でいうならば、安定感がない。

だから堂島秀美という三十歳をいくつも過ぎているGKから、いつまでもポジションを奪えない。堂島秀美は衰えたりとはいえ元日本代表なので、追い越せないのも仕方ないところはあるのだが。

とはいえ友子は長身のためにハイボール処理は常に安定しているし、様々な面において潜在能力がかなり高いことも分かっている。二十五歳と若く、伸びしろも期待出来るので、監督や高蓮コーチとしては、なんとか波をなくして正GKの座を奪うくらいに成長して欲しいと願っているのであるが。

非ビブス組のスローイン。投げるのは棕愛子。

布部洋子が足で受けたが、ビブス組の野本ハルに身体を入れられ、奪われてしまった。

それを見た茜は、走り出し、
「ハル、こつち！」

ボールを要求した。

「お姉ちゃん！」

そう叫ぶと野本ハルは、野本茜を目掛けて強く蹴った。

なおこの二人に血縁関係はまったくない。たまたま同姓というだけで、年下のハルが勝手に茜を姉呼ばわりしているだけである。

茜は久木成美と競り合いながら、落下地点へ入り込んだ。

目測どんぴしゃり。先に良い位置を占めた茜は、手で成美を押し退けるようにしながら胸でトラップ。地に落ちたところを、近くにいた西田久子へと蹴って預けると、素早く反転して前を向き、成美の横を通り抜けた。

久子からの浮き球のパスを、軽く跳躍しながら膝の内側で受けた。どつどつ、と激しい足音。柴野英子が猛然とプレスをかけてきた。茜は反転し、久子へ戻すふりをしつつ、そのままさらに反転、ぐるりルーレットで英子をかわすと、ボールを寺田なえに預け、走り出した。

さて、唐突ではあるが、ここから石巻ベースパロウの主要な選手を少しづつ紹介していこう。まず最初は、チームのキャプテンから。

【野本茜】のちあかね

背番号 6

身長 百六十三

年齢 二十六

愛称 あかねさん

趣味 カラオケ

特徴 キャプテンになって二年目。対人に強く、危機察知能力の高い、いまやチームに欠かせないボランチ。俊足とはいえないが動き出しの判断が速く、スピード系の相手にもしっかり対応する。フル代表に選出されたこともあるが、試合出場経験はない。自分に妥協を許さぬ厳しい態度で、選手からの信頼も厚い。趣味というか自分癒しのカラオケであるが、相当の音痴であり、聞いている方はぜん

ぜん癒されないという話である。

茜は、寺田なえを使ったワンツースでSBの布部洋子をもかわし、サイドを一気に駆け上がる。深くえぐり込むと、大きくマイナスのクロスボールを上げた。

だが、ゴール前さねあい みつみの実合美摘と合わなかった。茜の上げたボールは、ニアで待っていた美摘とGK堂島秀美の頭上を飛び越えて落ち、そのまま転がってゴールラインを割ってしまった。

茜は、美摘へと近寄った。

「ミツ、あたしがいまみたいな感じに抜け出して上げたら、相手の裏を抜けるようにファーへと飛び込んでよ。本当はアッキーもゴール前に上がってるはずで、彼女にはニアを狙うふりして攪乱してもらったようにしたいから。まあ、クロス精度悪くなってそっちにいつちやうかも知れないけど、そしたらもちろん、そのまま狙っていいから」

「はい」

美摘は、小さな声で小さく頷いた。

なお、いま会話に出てきたアッキーこと辻内秋菜は、仕事で遅れるとのことで、まだ来ていない。

さねあい みつみ
【実合美摘】

背番号 11

身長 百六十六

年齢 二十一歳

愛称 ミツ

趣味 タロット占い。ハムスターの飼育。

特徴 性格同様にプレーもおっとりしており、それが難点ともいえるが、ポストプレーの質や、シュートの決定力が高い。

現在このグラウンドで行っているのは紅白戦。チーム内での、試

合形式の練習試合だ。

日本女子サッカーリーグに所属するクラブチームである石巻ベイスパロウの、いつもの通りの練習風景である。

ここは、石巻ランドと呼ばれる練習場だ。

その名前は練習場の正式名称ではなく、単に数年前までこの隣の敷地に存在していた遊園地の名前である。

いつしか慣例的に遊園地名で練習場を呼ぶようになり、遊園地の運営会社が倒産して閉園した現在もそのまま使われているというだけだ。

石巻ベイスパロウは、女子のサッカークラブとしては非常に古く、三十年近くの歴史を持っている。

釣り餌大手メーカーの実業団チームである、はちだいFCプラネテスから始まって、別の大手企業へ移管されること二回、そして七年前に現在の市民クラブの形式となった。

創設当初は東北を代表する強豪であったが、現在ではその面影はまるでない。二部落ちの経験こそないが、毎年のように残留争いに巻き込まれている。年間順位が最下位であったのに翌年からチーム数が増えるために自動降格を免れたという年もある。

数年前の一過性なでしこフィーバーの影響で増えた一部リーグ十二チームであるが、来年からまた十チームに戻す予定であり、今年は下位二チームが自動降格、下位三位のチームがチャレンジリーグとの入れ替え戦を行なう。シーズン前から、今年こそはベイスパロウの悪運も尽き、残留綱渡りの綱が切れるなどとささやかれていたが、そう予想すること自体はおおかた誤りではなく、実際に現在の順位は残留圏ぎりぎりの九位である。

そんな、いつまでも晴れることのない低迷したチーム状況とは反対に、今日の天気は雲のほとんどない見事なまでの快晴。

とはいっても、現在七月の午後四時、太陽がきらきらときらきらと照り付けてオーブンレンジのように地面を焦がし続けていおり、ちよつと酷過ぎる。チーム状況が熱すぎる分には構わないが、これ

は、地獄である。

今日に限らず、ここ三日ほど、凄まじい猛暑が続いている。

じっとしているだけでも汗が止まらないくらいの暑さだというのに、彼女らは三時過ぎからずっと走り回っている。平日は夜七時からの練習であり、このような季節は選手にとってありがたいのであるが、照明の電気代がかかることもあり、ベイスパロウの土日練習は基本、日中になってしまうのである。

汗がどんどん絶え間なく噴き出してくるが、肌にとわりつくばかりで全然蒸発していかない。不快指数百だ。でも、身体から水分が失われているのは間違いなく、こまめに補給をしないと死んでしまう。

プレーが一時中断した際に、茜は周囲のみんなに給水の指示を出す、自分もピッチの外に置かれている給水ボトルへと向かった。

ボトルをぐいと押して一口含んだ、その時である。

不意に呼びかけられた茜は、そちらへと視線を向けた。そして、実に奇妙な、質問を受けた。

「ねえ、そのカッコイイ顔のお姉ちゃん、おれってまだここに所属してんの？」

フェンスのすぐ向こう側の公道に、まだ十代半ばと思われる少女が立っている。

ジーンズに、紺のＴシャツという簡素な服装。

色白の、あどけない顔。

ふわっとした肩までの髪。

なんだか折れてしまいそうなくらいに、ほっそりと、そして柔らかそうな体格。

よく知っている顔、篠原優衣だ。

でも、

「誰？ あんた」

茜は、いぶかしげな視線を少女に向けると、そう尋ねていた。

容姿に声に、どこをどう考えても優衣だというのに、でも茜には、

そうは思えなかったのだ。

優衣の態度が、あまりにも優衣らしくなかったから。

「あ、優衣！」

「優衣じゃん」

みんなが茜の周囲、つまり優衣のすぐそばへと集まってきた。

フェンス越しに優衣と対面した。

「もう、大丈夫なの？」

仙田チカが心配そうな表情。

「おう、大丈夫大丈夫。心配かけたみなの人。もう、ボール蹴りたくて蹴りたくて。あ、最初にいつとくけど、おれさ、よく分かんないけど、なんかちょっとだけおかしいんだけど、記憶がちょっと変らしいんだけど、事故で一時的なもんらしいから気にしないでね」

そういうと、フェンスに顔の肉をぐりぐりと押し付けた。

「なんかあ、記憶どころかそもその性格が違う気がする」

そう思ったのは、寺田なえだけではないだろう。

「いやいや、二十九年こんな感じよ。江戸の生まれよ」

優衣はがっしりとフェンスをよじ登り始めた。

「おい、事情は分かったから、ちゃんと入口から入んなよ。おえらいさんに見られたらどうすんだよ」

スポンサーの人とかさあ。

まだ多分に解せないところがあったが、それは後回しだ。茜は注意をしたが、しかし優衣は構わずてっぺんまで登ってしまった。

「すいません、遅れましたあ！ いやあ、仕事が長引いちゃって」

辻内秋菜が、正門の方から走ってきた。

沼尾妙子が後に続いている。

紺のタイトスカートに白いブラウス、紺のベスト、二人とも同じ服装だ。クラブのスポンサー企業で、一緒に事務などの仕事をやっているのである。

「もう、タエがクレーム起こしちゃうんだもの」

「あたしが起こしたわけじゃないよ！ 爆弾があたしの時に爆発しただけ。というか、そもそも仕掛けたのアッキーでしょうが」
サッカー優先の契約なので本来残業はないのだが、お客さんとのやり取りなどにより、たまにはこのように練習に遅れてしまうこともあるのだ。

「えー、覚えてないなあ。……おー、優衣じゃん。もういいんだ？ というか、何をやっとするのだお前は？」

秋菜は、フェンスにしがみついて下りてこようとしている優衣を発見すると、走り寄り、引きずり下ろし、彼女の頭を脇に抱え込みながら、こめかみに拳をぐりぐり。

「いてて！ 髪の毛いてて！ なにしゃがる、くそ」

優衣は突然の理不尽な暴力に悲鳴を上げた。自分も同じようなことを毎日、柴岡にやっていたものであるが。

「じゃ、一緒に着替えようぜ」。タエ、いこ」

秋菜は優衣の手をぐいぐい引っ張って、向こうに見える平屋のクラブハウスへと歩いていった。

【辻内秋菜】
つじうちあきな

背番号 9

身長 百五十四

年齢 二十七

愛称 アッキー、エロ姉さん

趣味 ショッピング。と、もう一つは秘密。絶対いえない。

特徴 小柄だが、快速と決定力を誇るストライカー。どんな体勢からも得点を狙えるのが強み。

【沼尾妙子】
ぬま おたえこ

背番号 7

身長 百五十六

年齢 二十三

愛称 タエ

趣味 熱帯魚観賞、園芸、小物作り

特徴 トップ下を得意とするが、CB以外のどこでもこなせる万能型。華奢な見た目の通り当なりに強くはないものの、しかし簡単には倒れないフィジカルバランスを持つ。現在所属する選手の中で、唯一の既婚者。

篠原優衣、辻内秋菜、沼尾妙子の三人は、かび臭さのぷんぷん漂う更衣室の中へと入った。

秋菜は鼻歌混じりに自分のロッカーの前に立つと、無造作に服を脱ぎ始めた。

シャツのボタンを外し、スカートをがっつと足元まで下げたところで、優衣がたまらず、うおおおおおと吠えるような悲鳴を上げた。

両手で自分の目を隠しながら、

「いけねえ、いけねえよ！ 嫁入り前の娘さんが、平気で男に裸を見せたらおしめえよ」

「どこよ、男って。でもまあ、あたし別に見られてもいいや。ね、タエ」

こんなことばかりいつているから、みんなからエロ姉さんなどと呼ばれてしまうのだ。

「一緒にしないでよ。嫌だよ、あたしは。嫁入り前じゃないけどさ」

沼尾妙子は二十三歳の若さながら既婚者。去年、高校時代の同級生と入籍したのだ。

「あ、そうかそうか。おれ、いま女なんだ」
「じゃあ気にすることないじゃん。」

なーんだ。と、ほっとした表情を浮かべて目隠しを解除する優衣であったが、解除した途端に飛び込んできた衝撃映像にまたしても絶叫し、目を覆った。

「身体が女でも、心は男だったああ！」

悶絶するように、ばったんばったんと激しく床をのた打ち回る優衣。

秋菜と妙子は、思わず顔を見合わせた。

「あのさあ、優衣、やっぱりまだ練習は無理なんじゃない？ 病院に行ったら？ お熱は大丈夫なのかにや？」

秋菜は倒れている優衣の上に馬乗りになると、顔を接近させ、自分のおでこを優衣のおでこに押し当てた。

「おおおお、シャツのボタンの全部外れたそのかつこのままでくっついてくんなああ！ またがってくんなああ！ そんなことより、病院なんかどうだっていいから、おれはサッカーがやりてえの！ 飢えてんの！」

着替えないことにはサッカーが出来ない。優衣は秋菜から逃げるように部屋の隅っこに行くと、二人を見なくて済むよう背を向けてようやく服を脱ぎ始めた。

かなり心臓、どきどきしてる。聞こえそうなくらい。

「ほんと、子供みたいな体型だね優衣って。むしろ、食べたくなっちゃうなあ」

優衣の背中に、秋菜が密着していた。

耳元に、息をかけてきた。

ぶつぶつ、ぶつぶつ、と一瞬のうちに優衣の肌全体に鳥肌が立っていた。

「離れる畜生！ 着替えくらいさせろや！」

何とかかんとかが着替えを済ませた優衣。これだけで、一日分の体力を使ってしまった気がする。

「早くしなよお！」

ドアの向こうから、寺田なえの大声が聞こえてきた。最近、秋菜がよく更衣室で優衣をからかうものだから、どうせ今日もと思って助けにきたのであろう。

「すぐ行くよ」

秋菜も大きな声で返事をした。

ハーフパンツのトレーニングウェアに着替えた三人は、更衣室を出た。

「サッカーじゃああああ！　ボール蹴るぞおらあ！　ゴール決めるぞおらあ！」

優衣は両手を天へと突き上げ、きらきら照り付けてくる太陽に向かって叫んだ。

「まだだよ」

秋菜は優衣の手をぐいっと引っ張り、走り出した。

まずは練習場を軽くランニングだ。

二人の背中を追いながら、優衣は焦れったさにずっと呻き声を発している。

ようやく走り終えたが、でもまだまだ。今度は三人でストレッチを開始。

それも終わって、ようやく他の選手たちの中に混じることが出来た。

「ええと、じゃあ、タエと優衣はビブスつけて」

茜が投げるビブスを、優衣と妙子は受け取った。

いまみんなで作っている練習は、狭く密集した中でのボール回し。一瞬の判断力が問われるし、足捌きなども鍛えられる、どこでもやっている基本的な練習だ。

お嬢ちゃんたちに、いっちょ年季の差を見せてやりますか。

余裕綽々の優衣であったが、いざ開始してみると、その自信はすぐにガラガラと音を立てて崩れることになった。

なんなんだ、この身体！

軟弱そうな身体に見えるけど、でもサッカー選手なのだし、よく知らんが世代別代表ということだし、身体は女だけどそれは相手だつて同じだし、そして何より自分には長年の経験がある。こんな基礎練習、もう二十年以上やっている。だから、そこそこ以上にやれるつもりでいた。

それなのに、頭で考えているような激しい動きが、身体がついて

こなくてまるで出来ない。

異常なまでに当たり弱い。相手と身体がちょっと接触するだけで、すぐにバランスを崩して転んでしまう。

と、また、妙子にぶつかって、ころころと転がってしまった。

こいつ、本当に代表だったのか。

ひでえぞ、これ。

「優衣、ちゃんとやれ！」

榎戸朱美コーチの怒声に、優衣はきよろきよる周囲を見回した。

「お前だよ！」

はつきり指をさされ、優衣はようやく自分のことと気が付いた。

「おいっす！」

立ち上がると、またボールを追って密集の中へ入った。

すっかり忘れてたけど、おれいま篠原優衣なんだよな。

おれがいま篠原優衣…… って、じゃあ、本当の篠原優衣は、どこに行ってしまったんだろうか。

優衣の中で、松島裕司はそんなことを考えていた。

おれの身体はもうこの世からなくなってしまったのだから、よくマンガなんかであるような、お互いの肉体が入れ替わるようなことは起こり得ないわけで…… そういう意味では、おれよりも、むしろ彼女の方こそが死んでしまったということなのだろうか。

もし本当にそうだってんなら、ちよつと気の毒には思うけど、申し訳ないと思うけど、でも、おれだって充分に気の毒な目にあってるよなあ。身体は死んじゃうし。こんな異常に貧弱な身体なんかに入っちゃうし。どうせならセリエAの誰かにでも入りや良かったよあ、でもイタリア語が喋れなくて困るか。

畜生、ただでさえ女の身体なんかでまともにサッカーなんかが出るかって話なのに、よりによってなんでこんな奴に……

だいたいなあ、サッカーつつうのはなあ、男のスポーツなんだよ。格闘技なんだよ。殺し合いなんだよ。ちんこぶらぶらさせてる生き物のスポーツなんだよ。

「優衣、どうしたばーっとして」

西田久子が、突っ立っている優衣を心配になったのか近寄ってきた。

「サッカーだったら、ちんぽこんだよ！」

「いきなり下品なこと叫ぶなバカ！」

顔面に容赦なくボールをぶつけられ、優衣は吹っ飛んだ。

「いってえな。下品は生れつきだ」

少なくとも、松島裕司にとっては。

【西田久子】

背番号 10

身長 百六十三

年齢 二十三

愛称 ひさこ、きゅうちゃん

趣味 筋トレ

特徴 視野の広さ、判断力、戦術理解、当たりの強さ、足元の技術などなど様々な能力に秀でている。唯一欠点と呼べる欠点は、とにかく走るのが遅いこと。十代の頃にフル代表選出された逸材であったが、右の足首に大怪我を負い、その影響である。なお、それ以降、代表には呼ばれていない。

ボールを使った練習は終了し、少しの休憩の後、今度は基礎体力向上メニューに入った。

まずは、千五百メートル×三。

懸命に頑張る優衣であるが、やはり身体が思うように動いてくれず、三本とも圧倒的最下位になってしまった。

別に順位を決めるものではないのでビリでも問題ないのだが、他のみんなは集団としてまとまって走っているというのに、一人だけ周回遅れになりそうなくらいにみんなから引き離されてしまっていて、それが悔しくて仕方なかった。

松島裕司の頃は、走ることに關しては瞬発力も持久力もトップだったのに。

「ねえ、おれって、いつも持久走こんなもんなの？」

大股開きで地面に腰を下ろし、ぜいぜいと息をしている優衣。隣の、仙田チカに尋ねた。

なおチカは、同じ条件で走り終えたばかりだというのに、全然息切れも見せず、悠々と全身の筋などを伸ばしている。上がったりがつたりを延々と行なうのSBである、とにかく持久力がなければやっていけない。

「うん、いつも遅いけど、でも今日はもっともっと遅いかなあ」

走れるものとはかり思って、最初飛ばしてしまったからだろうか。

「はい、じゃあ乳酸値測定するよ」

榎戸朱美コーチが、黒いバッグを抱えて近づいてきた。

「うつわあ、抜き打ちか。あたし嫌なんだよなあ、あれ」

辻内秋菜が、両手で自分の肩を抱いて、身体を震わせた。腕や足に鳥肌が立っている。

しかしそれ以上に、もっと遥かに圧倒的に嫌がっている者が、すぐ隣にいた。

「乳酸値測定って、あの、指にパチッてやるやつ？ え、え、嫌だよおれ！ 針大嫌い！ ほら、いま走ったのでも、おれもう遅いの分かってんじゃない。乳酸も、値が最悪だと思うよ、測るまでもなくだから、おれだけ除外。免除。ごめんこうむる。金輪際。絶対やんねえからな！」

「はいはい、じゃあお前からね」

と、コーチは優衣へと歩み寄る。

踵を返して逃げ出そうとする優衣。

榎戸コーチは素晴らしい瞬発力を見せ、一瞬の後には優衣の腕をしっかりとつちりと掴んでいた。元なでしこジャパンの誇る快速FW、いまだ衰えを見せず。

「やめてー！ せめて、せめて肘んとこで採血してくれ。そ

「つちなら、まだ、まだ我慢出来る。指に針なんて、絶対やりたくねえ！」

振りほどこうと暴れる優衣の細い腕を、榎戸コーチはぐいと締め上げた。

「今日ドクターいないんだから、注射針なんか使えるわけないですよ。秋菜、優衣を押さえ付けといて」

「諦めて我慢しよ、お互いさ」

秋菜はなんだか身体をくねらすようにいやらしく優衣に密着すると、羽交い締めにして押さえ付けた。

優衣は、なおも諦めず、泣き叫びながらも必死の抵抗を続けていたが、なにせ非力なこの肉体、運命の前にはいかんともしがたく、パチツと指に打たれてしまった。

「ああああああ！ 痛えよおお。畜生、くそ痛えよおおおお」

「いつやられるかって怖さはあるけど、そこまで痛いものでもないでしょうが！ ほら、指を出す！」

コーチに、両手で指を掴まれ、血を絞りとられた。

松島祐司の頃も、いつもなんとか頼み込んで肘にやってもらっていたものだから、指先での採血など十年ぶり。久しくやらない間に恐怖心が数倍増されており、それが爆発したものだから、終わってもなお泣き続けている。

「ねえ茜、優衣どうしたの？ さっき更衣室でも、男の前で裸になるなあなんて悲鳴あげるしさあ。優衣、大丈夫か？ おお、よしよし、いい子いい子。つつかこんくらいで泣いてんじゃねえよバカ！」

秋菜は、足元に泣き崩れている優衣の頭をなでなでしてやったかと思うと、いきなりぶん殴った。

「驚き方もまるで違ってたよねえ。いつもならアッキーが裸で抱き着くと、ひって息飲んで、赤くなって下向いてるだけだったのに、それがまあ、うおおおなんて叫んだと思ったら、ぎゃーぎゃーぎゃーぎゃー喚きながら床を転げ回ってさ」

妙子もなんだか不思議そうな顔で、でもちよっぴり楽しそうな顔

で、優衣を見下ろしている。

「ほら、この間の事故の、影響だつて。……確かに、なんだか男になっちゃってるよね。自分のこと、おれなんていつているし」

茜も優衣を見下ろし、苦笑した。

「そっぴやそっぴだね、実は性同一性障害だったのかお前は？」

秋葉は、優衣の顔をまじまじ覗き込んだ。

「ほつとけ。おれはおれだからおれなんだからおれでいいんだよ」

優衣はなんだか分からないことをいいながら、立ち上がった。

「お前ほんとに、悪霊にでも憑依されてんじゃないの？ まったくも一回病院に行けばっていったんだけど、そんなんよりおれはサッカーをしてえんだ、飢えてんだ、って」

「まあ、サッカーにガツガツとしてくれるのなら、それはそれで、いいことなのかな」

茜は人差し指で自分のほつぺたを軽くかいた。

優衣はこれまで世代別代表の常連であり、そして将来的にはフル代表に選ばれてもおかしくなくくらいの才能がある。それなのに、どこか淡々としているところがあつた。サッカーにしても、何にしろても、おそらくは生き方そのものが。当の本人は必死に頑張っているつもりなのかも知れないが、他人の目からはどうにも情熱を感じない。それが茜には、とてももどかかった。せつかく能力があるのに、本人にそれを伸ばす気力がまったくないような気がして。

それが改善されるというのなら、それはそれで歓迎したい。

でもやっぱり、性格はとつと元に戻って欲しいけど。元気になったところだけ、このままで。

さて、順々に採血は終わり、そして少し休憩。

その間に、優衣も完全復活だ。あくまでパチンとやられたシヨックからだけであつて、肉体は相変わらず今日これまでの疲労蓄積がろくに回復していないようであるが。

今度は、筋肉に激しい負荷をかけるトレーニング。

まずはラダー。梯子状の物を地面に置いて、その上を素早く大き

く腿上げをしながら往復するトレーニングだ。みな、足首には五百グラムずつのウェイトが巻かれている。優衣だけ特別に、二百グラム。

続いてタイヤ引きダッシュ。前への推進力を養う。タイヤだけでなく、五キロのウェイト入りのベストを着ている。優衣だけ特別にベストなし。

優衣はハンデを貰っているにもかかわらず、誰より真っ先に息切れ切れ。そもそも持久走が終わった時から、ろくに体力が回復していないのだから話にならない。

「体力、なさすぎるだろ、ほんとに、この身体は、もっと、鍛えて、おけっつーの」

もう、へとへと。ぶっ倒れそう。身体感覚が半分ない。息が苦しい。視界がぐるぐる回る。

それでもなんとか根性だけでタイヤを引っ張っていたのだが、ついにはそのタイヤの重みに足が滑るばかりで、ほとんど前進することが出来なくなってしまっていた。

意識の朦朧とする中でも、優衣は必死に、みんなに食らいについていこうと、自分に渴をいれていた。

だってさあ、いまやれることをやる。おれには、それしかないじゃないか。

こいつがおれでおれがこいつみたいなの、何がなんなのか分からない事態になってしまったわけだけど、とにかくやれることを頑張つて、その上で、その先に、なにが待っているか。それだけだ。なにもしなかったら、もうそこで終わり、なにも起こらない。

それに、こいつ、この身体、とりあえずこいつなりにはサッカーに打ち込んでいたんだろうから、練習を怠けて身体を鈍らせてしまったらしたら、いつかこいつが本当の自分に戻った時に、悪いしな。

でもまあ、こいつの代わりにつつても、勉強だけは無理だけど。だから交換条件つかなんつか、サッカーに関してだけは、とに

かく鍛えておいてやるよ。だから、もしも元に戻ったなら、まあ当
面は、机にかじりついて必死に勉強してくれや。落第しない程度に
は、おれも頑張ってるから。

優衣の肉体の中の松島祐司の精神は、どこかにいるかも知れない
本当の篠原優衣へと話し掛けていた。

周囲ぐるりと広がる澄み渡る青い空、ぽっかりぽっかり浮かぶ白
い雲を見上げながら。

本人も気付かない間に、地面に倒れてしまっていたのだ。
大の字になっていた。

涼しい風でも吹いていれば幾分か気持ちが良かったかも知れない
が、今日は無風、しかも相変わらずぎらぎら容赦なく照り付ける七
月の太陽、灼熱地獄。じりじりと、ひたすら身体が焦がされ焼かれ
ていくのを感じていたが、疲労と、感覚麻痺が上回って、この状況
に対して抗おうとする気持ちがまったく湧いてこなかった。

丸焼けになるならなれ。

あまりの疲労に、優衣はそのまま目を閉じて眠りについてしまっ
ていた。

「ほんと、どうしちゃったんだかなあ」

どのくらいの時間が経ったのであろうか。

野本茜の呟き声に、現へと意識が戻された。

ぼやけている視界。

むにゅむにゅした感触。

なんだか、揺れている。

どうやら茜にお姫様抱っこをされて、屋根の下へと運ばれるとこ
ろのようであった。優衣の体重は五十キロもなく、非常に軽いので、
誰でも簡単に持ち上げられるのだ。

意識は完全に戻っていたが、揺られる感じがなんとも心地よく、
優衣はそのまま寝たふりをしていた。

「うーん」

篠原優衣は腕を組んで、必死の形相。

なんだか顔が、ゆでダコのように真っ赤になっている。メーターが振り切れて壊れてしまいそうなくらいに、血圧が上昇しているのであらう。

首を右に傾け左に傾け、そして顔を上げ、口を開いた。シンキン
グタイム終了。

「分かりません！」

大威張りだ。

せつかくそこまで血圧を上昇させて頑張ってみたというのに、結局、問題に答えることが出来なかった。

ここは石巻聖亜女学院高等部、二年三組の教室。

優衣はチョークを持ち、黒板の前に立っている。

現在、数学の授業中である。

「お前……これ、小学生でも解ける問題やぞ。ただの分数の掛け算やないか」

数学担当の石狩先生が弱りきったような関西弁で、頭を掻くと、教室中にどつと笑いが起きた。

石狩先生は別にバカにしているわけではない。優衣に通常の問題を出したところ、理解があまりに酷くさっぱり分かっていなかった。ので、確かめる意味で問題のレベルを大幅に落としてみたというわけだ。

「じゃ、次の問題な。六たす七は分かるか？」

今度は、本当にバカにされたのかも知れない。

「そんなくらい分かるに決まってるんだろが！ ええと」

優衣は、自分の手の指を一本また一本と折り始めた。

そして、両の指を全部折りきった。

額から、つと汗がたれた。

「……指の数が足りなくて分かりません」

先生は、昭和のコントのように、がつくりと大袈裟に肩を落とした。

また、教室がどつと沸いた。

「あれえ、天才少女がすっかりバカになっちゃって」

「ほんつとバカだよねえ」

「もうこれさあ、死んでも治ないんじゃない？」

思い思い好きなことを口に出す女生徒たち。

「死んでも治りませんでしたー。って誰がバカだよ畜生！　ぶつとばすぞ！」

優衣は足を激しく踏み鳴らした。

これも事故の後遺症、と理解されているものの、しかし、これまでの天才秀才っぷりが気に入らなかった一部の者たちがこぞってこのような言葉を投げかけてくる。

優衣、というか松島裕司としては、事故など関係なく単に自分が本当に頭が悪いから答えられないと分かっているだけに、なんとも悔しい。こんな毛も生えそろってないような乳くせえ高校生のガキどもにこうまでバカにされるとは。

「てめえらは現役だからいいけど、十年も離れてれば、足し算なんか出来なくなつて当たり前だろ！」

優衣は拳を振り上げ、強く抗議した。

「ちよつとー、こいつ何いつてんの？　ほんつとバカ」

「入院しろ」

「こつちがホントの篠原なんじゃない？」

優衣はまた、だんと足を踏み鳴らした。

「うるせえ！　黙れ！　女ども！　だいたいな、学校の勉強なんて出来なくても立派な大人はいくらでもいるんだよ。てめえら松島裕司って「リーガー」知ってつか。死んじまったけど、あいつは凄えぞ。足が速いし。顔もまあ悪かないし。震災後の宮城に希望をもたらした大スターだぞ」

「知るか、そん奴」

「な〜にいつてんだか、バーカ」

コギヤルのような外見の吉岡君江にまでいわれてしまったことで、優衣はついに切れた。

自分でぶつち〜んなどと叫ぶ昭和生まれ特有のリアクションを取ったかと思うと、自席に戻り、隣の山本絵美さんからカッターナイフを借り、消しゴムを細かくきざんで、吉岡君江の背中を目掛けて投げ付け始めた。

「死ね、てめえ死ね！ 地獄へ堕ちろ！」

きざんでは投げ、きざんではは投げ、

それから一分後、優衣は一人、廊下に立たされていた。
両手にバケツを持って。

3

「えと、なんだ……夏の野菜ときのこのソースたつぷりハンバーグステーキと、若鶏のなんとかソースホイル蒸し、と、えーと、その他もろもろでございまーす」

スマイル0円、消費税込みで十三円でございまーす。

篠原優衣は、両手でがっちり持ったトレイを、客の待つテーブルの上に置いた。いや、あとちょっとというところで、ついトレイを傾けてしまって、上の物がずるずると滑って落ちそうになってしまった。なんとか持ち直すと、ふう、とため息をついて、額の汗を拭った。

「なんだっけ、そう、ごゆっくりどうぞだ。そんじゃ」

優衣は客に、ピツとおしゃれ敬礼をすると、テーブルから立ち去った。

ちよつとは慣れたてきたかな。さっきなど、料理を思い切りテーブルにぶちまけちゃったからな。その次なんか、傾いたのを慌てて戻そうとして、今度は自分にぶちまけちゃったし。

みんなよく、こんなの片手だけで、しかも左右それぞれの手に持って落とさず歩けるよな。どんな体幹の鍛え方をしてるんだよ。バ

ランスポールかなんかやってんのかな、やっぱり。

それにしても……

優衣は視線を落とすと、改めて自分の着ている服装に目をやった。

この格好……

「むっちやくちや恥ずかしいよなあ、これは」

思わず顔が赤くなってしまう。

黒を基調とした、ちよつとふりふりの付いた、ちよつとゴシック的な、そして、ちよつと丈が膝上のスカート。

メイド喫茶などの服装と比べれば程遠く地味だが、人によつてはそういつても通用しそうな雰囲気を持つ、そんな服装だ。

スカートなんてただでさえ、すっかすかした感触がどうにも頼りなくて気持ち悪くて大嫌いだつてのに、こんな物を学校以外でも履かなきゃならないとは。

でも、ここはぐつと我慢しねえと。

だつてこれつて、他人の身体だからな。他人の人生を、勝手に使つてしまつていただけだからな。

これまで篠原優衣がやってきていたことを、おれが勝手に判断して終らせてしまうわけにはいかない。

いつか返品することになった暁には、より良い状態にしておくか、百歩譲つても現状維持でないと、篠原優衣に申し訳ない。といつても勉強だけは、どうしようもないけど。

と、そういうところは妙に義理堅い松島裕司であつた。以前、病院に侵入しようとした時には、こいつが逮捕されようが構わんなどと完全に他人事だつたくせに。

ここは東北地方を中心に、全国にも展開しているファミリーストラン、ガジヨレ石巻井内店、JR陸前稻井駅前を走る県道沿いにある店舗だ。

個人経営のハンバーグレストランが買収され、店舗数が増え、さらに一流大手に買収されてそのままファミリーストランになったという、ちよつと変わった発展の経緯を持つチェーン店だ。

優衣はここで、ウエイトレスのアルバイトをしているのである。

事故後に父親が、娘がしばらく働けない旨を店に連絡していたらしいのだが、昨夜、忙しくて仕事が終わらないから出てくれないかと店長から直々に電話がかかってきた。

その電話で初めて、篠原優衣がアルバイトをしていることを知った。平日の三日、うち二日は早朝、それと土曜か日曜の夜、計四日高校に入ってからずっと、サッカーや勉強の間をぬって働いていたようだ。

家計の支えにするため、という目的で始めたらしいが、それだけではない気がする。おそらくは、客相手の仕事をすることで自分自身の性格を変えようとする意味もあったのではないだろうか。

心が本人ではないので、そう断定は出来ないが、でも一週間も篠原優衣として生活をしていれば、周囲の反応やら聞く話やら、几帳面に書かれた学習ノートやら綺麗にたたまれた服やら、人物に対してある程度の理解が出来てくるというものである。

「ああ、でもやっぱり我慢できねえ、この服、気色悪いいいい！」

ぞわりぞわりくる感触に、優衣は思わず全身をかきむしりたくな衝動にかられた。

ふりっふりがさわっさわで、脚の感触は妙に気持ち悪いし、見た目もなんともいえず恥ずかしいし。

しかも、仕事は何が何だか分からないし。

注文受けてそこへ運ぶだけかと思ったら、まあ仕組みのゴチャゴチャしてる。やり終えてもないうちに、次の仕事が来たり、忘れないよう必死に頭の中で唱えているとこにアホな客が声かけてくるし。

皿は落ちるわ割れるわ。

別のテーブルに届けてしまっていると、先輩から文句いわれるし。客もその場でよく確認しろっつーの。

そんな愚痴を心に呟きながら歩いていると、

「ねえ、篠原優衣さん」

客のいるテーブルの間を抜けようとしたところ、いきなり背後から尻を撫でられた。優衣はぐおっ、と悲鳴を上げ、危うくトレイを傾けて落としそうになってしまふのを、片足伸ばして踏ん張ってこらえた。

振り向くと、テーブルに大学生くらいの男たちが四人。

その中の、ちょっと曲がったナスビのような顔の男が、どうやら尻を触わり、声をかけてきた本人のようである。

「なんだてめえは」

声を落とし、凄む優衣。

「どうしたの？ 今日はずいぶん強く出るじゃない。へえ、ここつて客にそういう態度取るようになったんだあ」

嫌らしい笑みを浮かべた。

「申し訳ございません！」

ウエイトレス仲間の梶昭子が小走りにテーブルへと近寄ってくる、深く頭を下げ、優衣の頭も押さえ付けて強引に下げさせると腕を掴み、ぐいぐいと奥へと引っ張っていった。

「ああいうお客さんに、ああいう態度取ったら絶対にダメだって。でも、どうしたの？ いままで怒ったりしたこと一度もなかったのに」

梶昭子は小声で尋ねた。

その言葉から、以前の優衣がどんなだったか容易に想像がつく。

毅然とした態度に出ることが出来ずに、唇きゅつと結んで下を向いて黙っているだけだったのだろう。

「そんな、常に温厚なボクともあるう者が、怒ったりするはずないじゃないですか。それよりさ、なんなのあいつら？ 名前フルネームで知ってんだけど」

胸のバッジからは、「篠原」としか分からないはずなのに。

「そのことも覚えてないの？ 仕事を全部忘れちゃったことに比べれば、たいしたことないけど。あの人たちは、気の小さい篠原ちゃんをからかうのが楽しみの不良大学生だよ。名前は、聞かれるまま

に自分で答えちゃったんでしょうが。通ってる学校とか、中二までお父さんとお風呂に入ってたとか。……あっちのテーブルはあたしが変わるから、だから篠原ちゃんは五番から十一番をお願いね」

「はあ」

優衣はがりがり頭をかいだ。

「頭かかない！　ここレストランだよ」

梶昭子はそう注意すると、呼び出しブザーが押されたことに気づき、さつと笑顔へチェンジ、そのテーブルへと向かった。

「ああもう、面倒くせえなあ」

単純に仕事のことでだけでもそう思うのに、職場の人間関係なんかも、ちよっぴりここにいただけで、もう、なんだか色々とごちゃごちゃしたものを見せられるし、チーフとサブチーフの確執とか、女同士特有の対立関係とか、それにさつきみたいないなアホな客もいるしでもまあ、お金を稼ぐわけだし、仕方ないよな。

「リーガーとして、サッカーだけをやっていられた頃は単純でよかった。

いつ無職の身になるかという怖さはあったけど、他人との関係なんて、いちいち構築の努力をする必要もなかったし。ただ自分が一番になるために努力をする。それだけだった。試合に勝つために話し合うことは当然あるけど、誰に気がねすることなく本音をぶつけあっていただけだし。それで人間関係がおかしくなっただって別に構やしなかった。実際、殴り合い寸前の大喧嘩をしたことだって何度もあったし。

サッカーだけで飯を食えるって、本当に幸せだったんだな。

なのにあいつらは、本当に、よくやるよなあ。と、野本茜や、辻内秋菜ら、石巻ベイスパロウの選手たちの顔が浮かんた。

毎日毎日、昼間はずっとこんな感じに仕事をしてて、その日の夜になってようやく練習だもんな。

こんな仕事、ほんの何時間かやっただけで、もう嫌で嫌でたまらんというのに。

その上、サッカーで走り回るんだもんな。

それでへとへとになった疲れが抜け切れていないうちに、また明日が来て、また仕事して。

などと考えながら歩いていると、ドリンクバーのコーナーから突然子供が飛び出してきて、びっくりしたところ床の出っ張りに蹴つまづき、またしてもトレイの食器を床に全部ぶちまけて粉々に割ってしまった。

4

テレビのサッカー中継を見ていた優衣は、いつの間にも食べ物焦げたようなおいが部屋中に充満していることに気が付いた。

「なんだなんだ、このにおいは。いつからだよ」

珍しくズンダマーレ宮城がリードしているものだから、それに夢中で全然分からなかった。

においの元は、当然といえば当然だがキッチンからのようである。創作料理に果敢にチャレンジしていた優衣の父、正昭であったが、油加減を間違ったのか単にぼーっとしていたのか、とにかくフライパンで炒めていた肉や野菜を焦がしてしまったのだ。

「ああもう、なにやってんだ親父は。どいてな、おれが作ってやつから。男の手料理でもいいよな」

息子のような娘の態度に、正昭はよく分からないまま、うんうんと頷いた。

優衣は焦げの酷い部分を捨てて、残った部分を皿に移し替えた。次いで冷蔵庫に入っている食材を確認、取り出し、軽く洗うと、ざっくざっくと切り始めた。

以前の優衣であれば、しっかり下味をつけたり、食材を細かく丁寧に刻んだりしていたのに、それが今は豪快に、実に豪快に、真つ二つか三つにした程度のものを、どんどん大きなフライパンへとぶち込んでいく。

ある程度炒めたところで、先ほどの、正昭が失敗させてしまった

物も混ぜ込んだ。

肉やら野菜やら炒めているうちに、父上同様にちよつと焦げ臭さが漂い始めてきたが、木ベラでガシガシこそぎ落とすように掻き回すとそのまま料理続行。

塩をばつと振り掛け水戸泉、

バターをちよつ、

醤油をほんのちよろつ、

水溶き片栗粉をほんの少々、

後はさあ、掻き混ぜる掻き混ぜる。

火を止めて、

仕上げにスパイスを少々、

ほーら、松島裕ちゃん特製、野菜と肉のなんだかよく分からない炒め、出来ちゃった♪

優衣に促されるままテーブルへと着く父。娘の作った、男の手料理が大皿にてんこ盛られて、どんと目の前に置かれた。

「そんじゃお父たま、がつと召し上がれい！」

この態度。持ち前の適応能力で、もうすっかりこの家の生活に溶け込んでいた。

正昭は目の前に置かれた物体を、なんともいえない表情で見つめていた。

なんだか色合いの悪い様々な塊が、より集まって塔を作り上げている。

見たところ、要するに野菜炒めだ。

それは分かる。

しかし、一般的に野菜炒めとカレーライスは、適当に作ったとしても少なくとも見た目はまずそうには思えないものであるというのに、これは……

ひょつとして、この優衣は偽者で、自分を毒殺しようとしているのでは。

正昭は躊躇の表情を隠すことなく見せていたが、だがしかし、せ

っかく娘の作った料理である、意を決し、一つをつまんで口に放り込んだ。

と、その瞬間、渋そうだった顔の表情に変化が起きていた。

「おいしい」

驚いた。見た目もこんなだし、味付けも非常に雑ではあるのだが、それなりにうまい。

「おう、そうだろそうだろ」優衣はにんまり笑って「ちょっと焦げ焦げのともさ、まあイカスミとでも思えばなんてことないべ。勿体無いからな。見た目は悪いけどさ、腹に入りやあなんでも一緒。腹に入るのが一緒なら出てくる物も一緒ってな」

優衣のその口上に、正昭は口の中の物を吹き出しそうになった。そういう汚い話を平気でするような優衣だったか？

いや。そんなことはない。断じて。

しかし、どうしたことだろうか。事故の影響で態度に変化があったにしても、これはあまりにも別人格だ。過去の性格が、片鱗もない。

この優衣と一緒に生活を始めて、もう一週間以上も経っているとこののに、彼は改めてそんなことを考えていた。

もしかしたら、これまでずっと、常に何かに抑圧を感じていて、自分自身が嫌で、変わりたいという願望があつて……事故のショックというのは、そうした願望をただほんの少し後押ししただけなのではないだろうか。

そう考えると、つまりこれが本当の、娘のなりたかった自分。

いや、しかし……

こんな、下品なことを平気な顔で大声で叫ぶのが本当の優衣だとは……

父は、思わずまじまじと娘の顔を見つめていた。

熱いような冷たいような、なんだか妙な視線を受けていることに気付いた優衣は、その空気をかわすべく、テレビの方へと身体の向きを変えると、わざとらしく大きく脚を開いて荒っぽく座り直した。

ちなみにほとんど丈のないショートパンツ姿である。

「よし、ズンダ粘れ！ 今日勝てよ！」

しかし、ちょっと油断した途端に、開いた脚が勝手にぴったり閉じてしまった。

ぎりぎりと力を入れて、再び脚を開こうとするのだが、今度はなにか見えない力に抵抗されているように、なかなか開いてくれない。「くそ、強情、だな、てめえは、おれはいま、またを、おっぴろげてえんだよ」

優衣は顔を真っ赤にして、真剣に自分の脚と戦っていた。

篠原優衣の、DNAレベルにまで染み付いた習慣がそうさせるのか、それとも実は本人の魂がここにおいて、身体をコントロールしようとしているのか、とにかく最近、上品とはいえないような仕草を取ろうとすると、このようにして身体が逆らってくる事が多くて困っている。窮屈で仕方ない。

だが、困難ありて喜びあり。

優衣は渾身の力を込めた。

「勝ったぞ、おらあ！」

ばっかんと、百六十度完全に脚を開き切った優衣は、ヒーハーと勝どきの声を上げた。

「おれ様にはむかうなんざ、二十九年はええんだよ畜生。舐めんなよこらあ」

「優衣……」

正昭は僅かにぶるぶると身体を震わせながら、少しもの悲しそうな表情で、娘の顔を見つめていた。

「ん？」

最近、すっかり篠原優衣としての自覚が出て来ており、名前を呼ばれるとすぐに反応するようになった。それが良いことなのか悪いことなのかは分からないが。

「いや……なんでも。……そうそう、この前の話の続きだけど、別に優衣は、無理して母さんに会わなくてもいいんだからな。父さん

だって、優衣だけがいてくれればいいんだから」

「ん？ なんのこと？」

おれじゃねえ時のことかな。ま、どうでもいいや。

などと他人事に思っていると、突然、バリバリツと痛みにも似た電撃が頭を突き抜けた。いや、実際それは痛みであった。まるで、槍をぶつすりと突き立てられたかのような。

優衣はびくりと跳ね上がったかと思うと、両手で頭を押さえ、苦痛に顔を歪めた。呼吸を漏らすかのような、短く鋭い悲鳴を吐き出し、椅子から床に転げ落ちるように四つん這いになった。

「優衣、どうした？」

正昭は素早く立ち上がるとテーブルを周り、心配そうに手を差し出してきた。

「いや、なんでもねえ……」

片手を上げて父を制する優衣、しかしまた、突き刺す激痛に悲鳴を上げた。

映像、

言葉、

感情、

なんだよ、これは。

変なものが、どんどん頭の中になだれ込んでくる。

脳の神経に大量に流れてきたその刺激、情報を、痛みとして感じてしまったのであろうか。

だが痛みは、徐々におさまってきた。

優衣は、頭をぶるぶると横に振った。

「大丈夫か」

父は優衣の手を取った。

「ああ、ちよつと目眩しただけ。ごめんな、もう大丈夫だから」

「また、発作じゃないだろうな。目、見えるか？」

「見えるよ。もうなんともない」

なんだよ、また発作って。

そんなことより、今のはきつと、篠原優衣の、記憶だ。
でも、どうして。

優衣の魂からの伝言なのか、それとも、物理的な、優衣のこの脳から引き出された情報なのか。

確証はないが、前者、篠原優衣の意思である気がする。

多分、入れ替わるべきおれの肉体が死んでしまったことで、彼女は移れずに、この身体の中にいるんだ。

その篠原優衣の魂が、おれに伝えたいことを、ああやって伝えてきたんだ。

でも、なんだって、おれなんか……

頭にどつと入り込んできたのは、篠原優衣の、母親に関しての記憶であった。

ほんの微かに残っている、母についての記憶。

これまで優衣が生きてきた中での、母への思い。

それらは実に断片的なものではあったが、優衣の現状をある程度理解するには充分なものであった。

母親の育児放棄による、両親の離婚。

父親に愛されてはいたものの、でも、淋しかった幼少時代。

最初から母親はいないものとして、これまで生きてきた。

しかし先日、父が母らしき女性とこっさり会っているところを目撃してしまった。

その態度から考えるに、娘と暮らしたいからとよりを戻したがっているのは、おそらく母の方。

父としても、それについてじっくり話し合う用意はあるのだが、しかし、育児放棄をして自分を捨てた母親に果たして娘が会いたいであろうか、と遠慮しているのであろう。それで、はっきりと優衣に対してこの話を切り出せずにいる。

会っている場を見られてしまったことを、おそらく父は知っている。だから先ほかにして、母に会う必要はないなどと、優衣の気持ちを庇うようなことをわざわざいつてきたのだらう。

その密会の場を見てしまったことによるショックで、優衣は、より自分の心を胸の奥へと閉じ込めるようになってしまったようである。

わざわざ死ぬ気はないけど、死んだらそれで構わない。

自暴自棄とはちよつと違うが、とにかくすっかり弱り切った精神状態になっていた優衣。

そこに、あの事故が起きた。

そして、その身体に松島裕司の魂が入り込んだ。

篠原優衣は、消えてしまった？

いや、さつきも感じたけど、きつとこの身体の、心の、奥底の奥底に本当の優衣はいる。

でも、いるならなんで出てこない？

おれを押し退けて、この身体の支配権を奪い返そうとしない？

色々なことに立ち向かうのが面倒になったか？ 怖じけづいたか？

でも、そもそも育児放棄で両親が離婚って、物心つくずっと前の話だろ。

母ちゃんは最初からいないものとして、親父とずっと暮らしてきた、ただそれだけの話じゃないか。

ほとんど記憶にない母親のことで、なんだってそんなに落ち込んだり、びくびくしたりする必要があるんだ。

まだ引き出されていない篠原優衣の記憶、その中に、なにか重大なことでもあるのだろうか。

考えるのやめた！

成る事が必然ならば、動ぜずとも事は起こる。

それよりズンダ。

もうすぐ久々の勝利だ。

テレビに視線を向けた。

「あーーーーっ」

優衣と、実況が同時に叫んだ。

後半ロスタイム。追いつかれた。

そして、試合終了。

5

「おーっす！」

石巻ランドのロッカールームへ、篠原優衣は（最近の）いつものように大声を張り上げて入ってきた。

現在午後五時半。まだまだ夏の太陽がきらきら輝いている時間である。

ボールを蹴りたいから、と早めに来たのであるが、もう既に何人がおり、寄り集まって椅子に逆向きに座り、談笑などをしていた。「なになに、なんの話してんの？」

学校帰りにそのまま来ている優衣は、重そうなカバンとバッグを置いて一息つくと、端に置かれたパイプ椅子を引っ張り出して輪の中に入った。制服のスカートも気にせず、脚を大きく広げて逆向きに座る。

「サッカー選手のことだよ。優衣はさあ、どの選手が好きなん？あ、男子限定ね」

寺田なえが尋ねた。

「おおっ、よくぞ聞いてくださった」

優衣は嬉々とした表情で立ち上がると、片足を椅子の上にどっかと乗せた。

「松島裕司」

なんの躊躇も恥ずかしげも見せずに、即答した。

「ん？ ああ、宮城のね」

彼女らは一年に二回ほどズンダマーレ宮城のボールパーソンをとめるなど、それなりに関わりもあり、選手の名前はそこそこ知っているのだ。

「こないだ死んじゃったじゃん」

「走り回るだけや」

「簡単なシュート外すイメージしかない」

「変だったよあの人。あたし、演歌歌いながらピッチに入っていくの見たことある」

「うわ、それきもっ！」

ここに本人がいるとも知らずに、みんな好き勝手なことを口にしてる。

「瞬殺すつぞてめえら！」

やはり沸点に達してしまった。

「お、みんな早いねえ」

ドアが開き、野本茜が疲労困憊の四文字を隠しもせぬ表情で入ってきた。上下とも薄い青の作業着姿だ。

手を当てた右肩を、ぐるぐる回している。

「どうしたん？」

辻内秋菜が尋ねた。

「それがさあ、新人君が、加える調味料をことごとく間違つてて、弁当全部作り直しでさ。みんなで手分けして再配達。それでもガミガミ文句いつてくんのいるし、最後に回ったお客さんのとこなんか土下座までさせられたよ、あたし。ほんとと心身ともに疲れた。まあ、こつちが悪いんだから仕方ないんだけどね。ちゃんとしたお弁当を指定時間までに届けられなかったんだから」

脱力したように、固く冷たい床の上に寝そべってしまった。

「はあ、そりゃ大変だったな。じゃ、特別に肩でも揉んでやるよ」

話を聞いてちよつとだけ同情した優衣は、学校の制服姿のまま茜の背中に馬乗りになると、両手でそれぞれ左右の肩を揉み始めた。

「おう、きくう。って噓、ぜんっぜんきかないよ。ほんと力がないよな」

「おれにいわれたって知るかよ」

とはいえ非力といわれるのはちよつと悔しい。優衣はムキになって、体重をかけて肘で背骨両脇をぐりぐりし始めた。

「お、それならききそう。でも、もうちょい強めで」

「おう。つつか茜ちゃん二十代だろ一応。肩凝りなんかになってん

じゃねえよ」

優衣は思い切り、ほぼ全体重をかけた。

「なるんだからしょうがない。あと、一応じゃない、まだ二十六。ケアを自腹でやってるから金がなくて大変だよ。もう貯金すつからかんで、先月から全然行けてないし。だからこんな凝ってたんだよ。うお、いいかも、それ。もうちょい下までやって。そうそう、そこ、いい！」

「サッカーのためのケアだろ、なんだよ、ここの年俸も勝利給もないくせに、そんな金まで選手に出させるのかよ。酷えな、掛け合った方がいいぞ」

「お前なあ、もう何年もここにいて、何を見てきたんだよ？ みんな、そんなの覚悟の上でやってんだよ。だいたい、クラブのどこにそんな金があると思う？」

一部リーグの中にだって、トップ登録選手にも関わらず遠征費は自腹で、それどころか月々の参加費まで払わせるようなところもあるのだ。ベースパロウは、まだましな方だ。

「そういわれても、釈然としねえなあ。だってさあＪリーガーなんて、まあプロなんだから金をもらえるのは当然で、その上そうしたケアも全部やつてもらってたぞ。ズンダなんか専属マッサージがいたし。去年、酸素カプセルなんてくそ高え機械買っちゃったりなんかしてさあ。上に乗っかって遊んでて、雇みたいな透明のどこぶっ壊しちゃったけど」

「はあ、なんで優衣がそんなところで、そんなことしてんだよ？」

そばで椅子に座って話を聞いていた秋菜が、ふと疑問を口にした。「あ、いや、こっちの話だ」

しかし、なんでこいつら、そんな劣悪な環境で、そうまでサッカーをやりたいんだよ。さっぱり理解出来ねえ。おれはまあ、高校生って立場だからまだいいんだけど。

などと思っていると、またドアが開いて、他の選手たちがそろそろ入ってきた。

もう、時間だ。

優衣たちはトレーニングウェアに着替えると、外へ出た。早く蹴りたくて早く来たというのに、つい関係のないことで時間を潰してしまった。

外へ出た彼女らは、まずはみんなで練習の準備を開始。

用具置き場から必要な道具を引っ張り出し、コートまで運び、カラーコーンをならべ、数人掛けりでゴールを設置、ラダーを置き、ボールを置いた。

いつの間にか笹本監督、高蓮GKコーチが姿を見せていた。

監督の指示の下、まずはジョギングを開始。

広大なグラウンドを一周すると、続いてストレッチ。

そして、いよいよ本格的な練習だ。

「よっしゃ、ちよつくら子羊ちゃんどもを可愛がってやりますか」

優衣は指をばきばき鳴らした。

「出たな、ニューバージョン優衣の上から目線。頑張つて、今日は最後までもたせてね」

寺田なえが、からかってきた。ジョギングですっかり息が上がっているくせに強がっている優衣の姿を見て、つい意地悪したくなつてしまったのだ。

ミスター宮城という過去の栄光がそうさせるのかは分からないが、練習前の優衣の態度はいつもこう。しかし、いざ練習が始まってみると、あまりの体力のなさに、あつという間にへたばつてしまう。

今日も、まったくその通りであった。

体力がないだけではない。女子でしかも世代別とはいえ、日本代表という存在であるはずなのに、なんだか技術的な面すらもおかしかった。思うようにボールを扱うことが出来ず、監督やコーチからは怒られてばかり。

日本代表の肉体に、ミスター宮城の精神、これでなんでこうなる？ こいつ、実はたいしたことないんじゃないか？ それでトップチームに所属だの、日本代表だのなんていってんだから、とどのつ

まり女子のレベルなんてそんなもんなんだよ。

「優衣！ 起きろ！ バカ！」

それなのになんで、おれだけ怒られる？

監督の怒声に、よろよろと立ち上がる優衣。ボール保持奪取の練習で、沼尾妙子に突っ込んでボールを奪おうとしてかわされ思い切り転んでしまったのだ。

あまりに不様な優衣の姿に、野本茜が見兼ねて近寄ってきた。

「優衣さあ、自分の身体を使いこなせなくなってるよ。自分、どんなプレーが得意なのか思い出してみな。それと、無理に相手に突っ込まなくていい。フィジカル勝負なんか仕掛けるな。優衣から技術を取っちゃったら、体力無ししか残らないんだぞ」

いわれてみれば、自分は篠原優衣がどういう選手なのかを知らない。力より技のタイプであるらしいということだけだ。しかし現在のその技すらも、てんで発揮出来ない状態だし、一体なにをどうすれば少しはまともにボールを蹴られるのか。さっぱりだ。

だいたいおれ、センターFW一筋だったし……。ボールを受けて走って、シュートするだけだったし。

今度は、茜から受けたパスを敵である美摘につい渡してしまった。「なんでわざわざ相手にパス出すんだよ。お前の新しい趣味か？ ふざけてないでいいから、少しは真面目にやれよ！」

今度の怒声の主は監督でもコーチでもなく、西田久子だ。怒声というより罵声という方が近いかも知れない。

ムカツときた。

上手く身体を動かせないでいるこっちの気も知らねえで、クソ女が。

優衣はボールを手前に転がすと、突如助走をし、久子の背中をめがけてシャイニング爆熱シュート！……しかし優衣のその足は、直前で止まり、ボールをちゃんと押したただけだった。

躊躇したわけではない。

練習中のミスにかこつけて、殺意満々嬉々として蹴り脚を上げた

はずだ。

また、例のごとく何らかの力が身体に働いて、行動を制限されてしまったのである。

優衣はボールの前で、何とか再び蹴り足を上げよう、蹴ってやろうと悪戦苦闘。

「ったくもう、またかよこの身体！ おい、てめえ優衣か？ そこにいんのか？ こら。邪魔すんじゃないよ！ 文句あんなら出てこいや！ いや、まだ引っ込んでろ、邪魔すんな！ あのくそ女、むかつくから、ボールぶつけてやんだからよ！ …… って、だから邪魔すんなってんだよ！」

どれだけのせめぎあいだ優衣の体内脳内で発生しているのか、真っ赤な顔をしたその必死な表情から想像するしかない。

「なにやってんだ？ 優衣は」

「さあ」

辻内秋菜と沼尾妙子が、不思議そうに顔を見合わせている。

6

文字通りに散らばりまくった物々の中心に埋もれるように、あぐらをかき頭をかき途方に暮れていた優衣であつたが、ようやく重い腰を上げると作業を再開した。

何をしているのかというと、なんのことはなく、自室の整理をしているところだ。

思い立って始めてみたは良いが、散らかり具合のあまりの酷さに片付けても片付けてもきりがなく、身体よりもむしる頭が痛くなってきたで一休みをしていたのだ。

あの事故の後、初めてこの部屋に入った時には片付けるものなど何もないくらいに綺麗だったのだが、一週間もしないうちに足の踏み場もないくらいにグチャグチャな惨状へと変えてしまった優衣。

クラスの、自分と友人であるらしいところの麓絵美と小菅洋子が

「明日、ひつさびさに優衣ん家に遊びに行つてあげるよ」とやらいい出して、じゃあさすがにちよつとはこの状況をなんとかしないとなあ、という気持ちになつたのが部屋片付けを始めた発端である。

その片付けのさなか、机の本棚の端に、日記帳を見つけた。

茶色いハードカバー、錠前付きの日記帳であるが、だがその錠は、かかつていないようだ。まさか書いた当人も、誰か他人が読むなどと思つてもいなかったのだろう。

それとも、父親になら見られても構わないと考えているのか。

ハードカバーの厚みを差っ引いても、かなりの分量がある。本当に日記用途に使用しているのかは分からないが、そうであれば、書き始めたばかりでもない限りは相当な日数分がありそうだ。

単に淡々と日々の出来事を記しているだけの備忘録的な物なのか、それとも自己内面についてなども書いてあるようなものなのか。

もしかしたら、篠原優衣の悩みや、母親についての思いなども、ここから分かるかも知れない。

以前に母親とのことに関連した、篠原優衣の記憶がどつとなだれ込んできたことがあつた。それにより色々な事を理解出来た半面、より多くの疑問も発生した。いま手にしているのが優衣のつけている日記帳なのであれば、読んでみることでそうした疑問点が色々と晴れるような気がする。

ゆっくりと手を伸ばし、錠前の部分に触れてみた。

また身体が動かなくなるのではないかと思つたが、特に、抵抗されることはなかった。

おれが開ける気がないことを、分かっていたからだろうか。

それとも、読まれても構わないと思つていいのか。

結局、日記帳は開けなかった。

机の引き出しの中から鍵を探し出してかけると、本棚の元の場所へとそつと戻した。

二〇一四年 七月二十日 日曜日

日本女子サッカーリーグ 第十一節

石巻ベイスパロウ 対 パッション熊本FC

会場 石巻臨海陸上競技場（宮城県石巻市）

久々の試合を迎えるにあたり、優衣は胸の高鳴るのを抑えることが出来なかった。昨日夕方のメンバー発表からずっと、そわそわわそわ。今の今までずっと同じテンションが持続されている。いや、開始も直前となって、さらにテンションアップしたかも知れない。「ついに初の公式戦がキターーー！」

満面の笑みを浮かべ、両手を突き上げ、叫んだ。背景には大波がざぶーん、ジャンボジェットがド迫力で唸りを上げて飛んでいく。

「初の？」

野本茜が、さりげなく突っ込みを入れた。

「あ、いや、こっちの話」

頭をかいた。

優衣の髪質は細くふんわりしているのだが、大量の汗で、じっとりして、いまにも頭に張り付きそう。

「この暑いのに、意味もなくバカみたいな大声出して無駄な体力消耗してんじゃないよ」

西田久子が、優衣に一瞥すらくれず、目の前を横切った。

「くそう、いちいちうるせえな、いつもいつもあいつは。試合中後ろからパンツ脱がしたるか」

耳に入らないように、ぼそりぼそり小声で文句をいう優衣。

あんな性格の悪いどうしようもない嫌味ばかりの女よりも試合だ試合。

この身体に入り込んで一ヶ月弱、とうとう公式戦でプレー出来る日がきたのだ。しかももしかスタメンだ。ここで頑張らなくていつ頑張るのか。女の子の試合に野郎が出ていいのかという後ろめたさはあるが、でも身体は本当に女なんだし、そんな気にすることもな

いだろう。それより試合だ。サッカーだ。

しかし嫌味女のいつていた通り、今日は本当に暑いな。

太陽が地球のことを嫌いにでもなったのか、容赦のない熱波を絶え間なく送り込んでくる。

照り付けられた地面と、陸空両面から挟み撃ちで焼き焦がされているというのに、その上、昨日の土砂降りの雨が地中に染み込んでいて、蒸されて湿気までもが凄まじい。

ただそこに立っているだけでも不快極まりない天候。だが、優衣はさほど気にも留めていなかった。これから試合が出来るという嬉しさの方が、遥かに勝っていたから。

両チームとも、つい先ほどアップを終えて引き上げており、ユニフォーム姿になって改めて入場するところだ。

「それでは選手入場です。みなさん、大きな拍手で迎えて下さい」
女性の声が場内に響いた。

実にたどたくしく、滑舌も悪い。

この日だけのアルバイトであろうか。先ほなどと、ホームの選手の名前を読み間違えていたし。

選手がピッチへと姿を表すと、会場から一斉に拍手が起きた。

そしてスタンドの端にいる両サポーターの太鼓の音、チーム名コール。

ここは石巻臨海陸上競技場。石巻ベースパロウがホームスタジアムとして使用する、二つの競技場のうちのひとつだ。

メインスタンドのみで、三千人収容の小さなスタジアムだ。ゴール裏やバックスタンドを芝生席として使用可能で、その際には一万人以上の収容が可能だが、建設以来一度も開放されたことはない。

宮城県石巻市、やはり東北の地はあまりにも遠いのか、パッション熊本の真っ赤なレプリカユニフォームを着ている者はスタンドの端で大きな太鼓を叩いているその一人しかない。自分で叩く太鼓のリズムに合わせて、ガラガラ声を張り上げている。

まあ、ホームであるベースパロウにしても、二十人いるかいらない

かという程度であったが。

これが、なでしこリーグの現状である。

メインスタンドの両端にはそれぞれのサポーター。

その間には、サッカー観戦を楽しみに来ているだけの一般の観客。勿論この中にもサポーターや、選手の肉親など、はつきりした応援のベクトルを持つ者もいるのである。大半は、近場でやっている無料の試合だから観に来ているというだけである。

すべて合わせて三、四百人といったところであろうか。対戦カードや天候などで左右されるが、今日はだいたい平均入場者数と同じくらいだ。

灼熱の太陽と質の悪い芝（しかも湿気がぬるぬる湧き上がってくる）との間に挟まれた二十二人の戦士たちは、それぞれの陣地にて円陣を組んだ。

「よおしてめえら、絶対勝つぞ！ 九十分走り切るぞ。指切りげんまんだ！ ファイトツ、ファイトツ、ズンダツ！」

優衣は、つい松島裕司の頃の癖で、キャプテンとして円陣を切ってしまった。

無表情で、じーっと自分の顔を見つめている久子の視線に気が付き、慌てて口を閉ざした。

くそ、黙っていても鬱陶しいな、この女は。

「なんか優衣に持ってたかれちゃったけど、この試合、絶対に勝つよ。うちが調子を上げるためにも落とせない相手だ。二部上がりだけど一番勢いのあるチーム。でも油断しなければ勝てる。勢いに飲まれず、自分らのプレーで戦っていいこう」

本物のキャプテンである野本茜が、改めてしめた。

「ベースパロウ」

「ファイトオー！」

選手たちの元気な叫び声が場内に轟いた。

円陣が解かれると、それぞれ走り出してピッチ上に散らばった。パッション熊本の選手たちは、もうとっくにそれぞれのポジション

ンについて、柔軟をしたり、靴の紐を結び直したり、思い思いに戦意を高めている。彼女らが着ているのはセカンドユニフォームで、上下とも白。ちなみに今日は着ていないがこのチームのファーストユニフォームは真紅である。

ホームである石巻ベイスパロウは、オレンジ色。

茜はそのオレンジ色のユニフォームに身を包み、腰に手を当て左右に捻りながら、これから対戦することになる選手たちを、ぐるり見渡した。

先ほどみんなに注意を促した通り、熊本はいま一番勢いのあるチームだ。

もともとは、女子サッカーリーグに加入してからずっと二部で、さらにその中でも常に最下位を独走するチームであった。二部からの降格という制度がなかったこともあり、まともな強化に動かなかったのだ。

数年前、降格制度が出来た年に、早速にして降格が決定した。

二部最下位と地域リーグ上位チームとで、チャレンジリーグ参入戦、つまり熊本にとっては文字通りの入れ替え戦、を行った結果、東京都のチームに敗れて降格が決まったのだ。

それをきっかけとして、クラブは大きく変わることになった。まずフロント陣の交替、そしてスポンサー募集に力を入れ、Jリーグクラブと提携を結び、大手スポーツクラブともメインスポンサー締結、初めて胸スポンサーがついた、そうした努力により安定した練習環境の提供や職の幹旋が出来るようになり、それを活かした大補強、などなど抜本的改革に本腰を入れた結果、一年で二部復帰、そこからさらに二年をかけて念願の一部昇格を果たしたのである。

社会人リーグ時代に補強したきりの選手層でチャレンジすることになった本年度、さすがに一部リーグで戦い抜くのは厳しいだろうといわれていた。しかしいざ蓋を開けてみれば、これまでの十試合のうち負けたのが開幕戦のみという、誰もが予想していなかった快進撃。優勝候補筆頭である神戸SCにも、二点を先行されながらも

後半のゴールラッシュで逆転勝ちしてしまったのだから。

ぎりぎり残留圏のベイスパロウよりも、当然ながら順位は遙かに上だ。

確かに実力はあるのだろうけど、でも半分は勢い。こちらがそれを受けてしまわず、巧妙に、うまく相手を焦らせるような試合運びが出来れば、色々なボロが出てくるはずだ。と、茜はそう考えている。

「公式戦最高オオ！」

優衣が、両手を天へ突き上げ雄叫びを上げている。

茜は苦笑した。

「ゆーい、また久子にどやされるぞお」

元気なのは頼もしいけど、飛ばしすぎて途中でばてたりしないでよね。

間もなくキックオフ、散らばった選手たちは、いまかいまかと開始の笛を待っている。

主審は、笛を手に取ると口にくわえた。

センターサークルの中で、FWの辻内秋菜はきつと前を向き、ボールを軽く踏み付けた。

主審、後藤恵美子は軽く手を上げると、試合開始を告げる長い笛を吹いた。

空気のゆらゆら揺らめく猛暑と多湿のスタジアムで、ベイスパロウボールにより試合が始まった。

笛とほとんど同時に、パッション熊本の九番、FWの牛尾望が全力でボールへと突っ込んで行く。うしおのぞみ

辻内秋菜はくるりと後ろを向くと、沼尾妙子へとパス。

前へ軽く走りながら受けた妙子は、一度止まり、前線にいる味方が駆け上がっていくのを確認すると、強く前方の左サイドへと蹴った。

西田久子が落下地点へと向かう。しかし久子はあまり足が速くないため、もっと遠くから俊足を飛ばしてきた熊本の永瀬奈々に大き

くクリアされてしまった。

クリアボールは、中盤まで下がってきていたパッション熊本の長身FW平良美たいましの足元に、ちょうど落ちた。

平良美が前を向こうとしたその瞬間、優衣がスライディングで、そのボールを奪っていた。

素早く立ち上がると、平良美に背を向けて、スペースを見つけてドリブルで駆け上がる。

ほとんど速度を殺さないまま、パッション熊本DFの外間恵理そとまえりの横を抜けた。

がつ、と骨に響く感触、優衣は前につんのめるようによろけた。足元のボールがなくなっていた。

振り返ると、外間恵理が大きくボールを蹴るところであった。

山なりのボールは、またしても、前線で待つ平良美へと渡った。

ボランチの寺田なえがすつと走り寄り、奪おうとするが、相手の大きな背中があるばかりで、全然正面へ回り込むことが出来ない。平良美はただ大きいだけでなく、ボールキープの能力や判断力も非常に優れているという情報は聞いていたが、いままさに、その実力を遺憾なく発揮していた。

平良美は、そばに走り寄ってきた牛尾望へと出す素振りを見せ、身体を反転、反対サイドへと強く蹴った。

そこにはフリーで悠々右サイドを駆け上がっている、MF郷田ほたるの姿があった。

郷田ほたるはボールの来るのを視認すると、脚の回転を加速、軽く跳躍しながら膝の内側でボールを受けた。着地すると、ほとんど勢いを落とすことなく走り続けた。

彼女は地域リーグ時代の大補強の際に加入し、熊本大躍進の原動力となっている選手である。五年前に行われたU20北京大会の優勝メンバーの一人で、その後サッカーを辞めて大学進学、教員となったが、熊本フロントの熱意に現役復帰をしたのだ。

寺田なえに押し出されるように、仙田チカがようやく郷田ほたる

へと向かったが、時すでに遅く、低く速いアーリークロスを上げられてしまっていた。

ベイスパロウゴール前には、FPが両者同数。

それとGKの堂島秀美。彼女は、飛んでくるボールに全神経を集中させ、構えた。

勢いもあつて怖いクロスではあつたが、精度が悪かった。ボールは、ゴール前にひしめく選手たちの上を越えて、落ちて転がり、コーナー付近でタッチラインを割った。

「チカ、上げさせんなよ！ それと、マークははつきり！ なえも！ 集中！」

茜は手を激しく叩いた。

失点しなかったから良いというものではない。

いまのは、たまたま蹴り損ねてしまっただけで、こっちにとつてただ運が良かっただけだ。郷田ほたるは、ほぼ毎試合のように高速ピンポイントクロスでアシストを決めているのだから。

スローインは、石巻ベイスパロウSBの仙田チカ。タイミングを見計らい、投げた。

寺田なえが胸で受けたその瞬間、背後からパッション熊本の選手ががつがつと乱暴に身体をぶつけてきて、あわやボールを失うところであつたが、なんとか奪われずチカに戻した。

チカは一步踏み出しながら、大きく前方へと蹴った。

パッション熊本の十八番、ボランチの永瀬奈々が落下地点に入り、胸トラップの体勢に入つたが、受けるその寸前、彼女の正面をベイスパロウの西田久子が横切るように走り抜けて、奪い取っていた。

久子は独創性を発揮するよりも、堅実常識的なプレーを素早い判断力かつ高い技術レベルで行う選手だ。その判断力を活かし、永瀬奈々から奪ったその瞬間には、相手のCB二人の間を通すパスを出していた。

そのスルーパスを予期し、飛び出していたのは辻内秋菜。オフサイドはない。

秋菜は自慢の快足でボールへと迫る。

客席が沸いた。

相手GKと一対一。

しかしボールまで、あと一步というところで、後ろから追ってきたC Bの田口麻奈に身体をぶつけられ、転ばされ、奪い取られてしまった。

手で突き飛されたようにも見えたが、しかし笛は吹かれなかった。吹かれていれば、PK獲得だったのだが。

ごろごろ転がった秋菜は、上体を起こすと、悔しがって両手で地面を叩いた。簡単に倒されてしまった自分への苛立ちなのか、判定がファールでなかったことへの不満なのかは、本人しか知る由もないが。

奪い返そうと、猛然と駆け寄る優衣であったが、勢いありすぎて簡単にかわされてしまう。なおも蛇のように食らいつこうとするが、田口麻奈にはそれに付き合う義理もなく大きくクリアしてこの場を逃れた。

「優衣、あまり無駄走りするな！」

茜が注意する。

無駄走りを重ねに重ね、なんとか一点をもぎ取り、争うのがサッカーという競技であるが、ただ無意味に走っていても肝心な時に走れなくなってしまう。まして、優衣なのであればなおさらだ。

パッション熊本のボランチ永瀬奈々から、右SHの郷田ほたるへとグラウンダーの速いパスが出た。

だがベイスパロウの左SB、仙田チカが読んでいた。すつと軌道上へと走り込み、足を伸ばしてパスカット。

それを合図にベイスパロウの選手たちが、前線へと上がり出した。熊本はボールが郷田ほたるへ渡ることを信じて、攻撃的にスイッチを切り替えたところであったため、守備への対応が遅れた。

タッチライン沿いを駆け上がりながら、仙田チカは大きく蹴ってサイドチェンジ。右サイド側、前方で優衣が右膝の内側でトラップ。

「優衣！」

オーバーラップする右SBの布部洋子。

洋子は優衣からボールを受け、勢いよく駆け上がっていく。郷田ほたるのプレーに触発されたのかも知れない。

ポストプレーが得意なFW実合美摘へと浮き球で送って渡すか、もう一人かわしてパスコース作って、辻内秋菜を走らせるか、などとこの一瞬のうちに考えていた洋子であったが、しかし、どちらも実行されることはなかった。

背後から、まるで体当たりのように強引に身体を入れられ、転ばされたのである。

捻ってしまったのか、洋子は悲鳴を上げ、痛みに顔を歪め、右の足首を押さえて転げ回っている。

笛の音。

主審は、パッション熊本の外間恵理に向けてイエローカードを掲げた。

洋子は完全にサイドを突破しており、なおかつ熊本のゴール前も薄くなっていった。おそらくは覚悟の上でのファールだったのだろう。「優衣、いまのうちに水飲んでおきな」

西田久子はタッチライン沿いに置いてあるベイスパロウ用の給水ボトルを拾うと、口の中に流し込んだ。

そのボトルを、優衣へと投げた。

優衣はそれを受け取ったが、しかし飲まずに、こっそりと地面に放り捨てた。

猛暑は確かに身体にこたえていたが、喉の渇き自体はそれほど感じでいなかったのが理由の一つ。

それと、この身体が松島裕司と比べてあまりに鈍足で、走っていてイライラするので、一グラムたりとも身体を重くなどしたくなかったというのが一つ。

それと最後が、西田久子に命令されて従うというのがどうにも癪だったということ。

「ああ、痛かったあ」

布部洋子は、まだ険しい顔のままだ。ゆっくりと立ち上がると、具合を確かめるように、とんとんと右足で軽く地面を蹴った。大丈夫そうだ。

このファールにより、ベースパロウにFKが与えられた。

と、その時、

「優衣、頑張れ」

観客席から、聞き覚えのある声が聞こえてきた。

高校で同じクラスの、麓絵美が手を振っているのが見えた。その隣には小菅洋子もいる。二人で応援に来たようだ。

そろそろと、熊本ゴール前へと向かう両チームの選手たち。

優衣も一緒になって歩き出した。客席にいる、篠原優衣の友人たちへ、大きく手を振り返しながら。

「ちよつと優衣！ なにやってんの？」

寺田なえが、優衣の華奢な背中に声をかけた。

「あ、いや、おれの友達らしいんで」

よくは分からないけど。

「じゃなくて、FK優衣でしょ」

「そっか。冗談冗談」

優衣はくるり反転、わははと笑いながら洋子が倒された場所へと向かった。

つい、松島裕司の癖で、ゴール前に行ってしまうところだった。

距離短いのは、おれが蹴るんだっけ。

しかし、おれにFKなんか蹴れるんだろうか。この身体に染み付いた技術力のせいなのか分からんが、昨日の練習では悪くないボールを何度も上げていたけど。

などなど心に呟きながら、ボールをセット。

「もつと後ろ！」

主審に注意されて、ずっと後ろに下げさせられた。

素で勘違いしてた。

でも、どこだっというじゃねえか。こっちはFK初心者だぞ。笛が鳴った。

優衣は助走のため、ボールとの距離を空けた。あれ、そもそもどんなふうに蹴るんだっけ？

やべ、忘れた……

冷や汗がたれた。猛暑で、そうでない汗もどばどば出ているので、何がどの汗かなど分からないけど。

「優衣、頼むよ」

ゴール前で、辻内秋菜が激しく手を振っている。自分を目掛けて良いボールを上げると要求しているのだ。

そもそも、こっちは蹴り方を忘れてるってのに。

もうどこへでも飛べ！

開き直った優衣は、ボールへ走り寄り、蹴り上げた。何も考えず、この身体にすべてを任せて。

だがしかし、どこへでも飛べは良いが、あまりにも酷すぎた。どこをどのように蹴ったものか、ボールはボーリングのピンのように強く真横へと跳ね飛んだ。

カウンター要員としてセンターサークル付近に残っていた、パツシヨン熊本の牛尾望の胸へと綺麗におさまっていた。

このような事態を誰も予測出来るはずもなく、相手ゴール前に上がっていたベイスパロウの選手たちは慌て戻り始める。

ボーナスチャンスとばかりに走り出すのは勿論、牛尾望である。

引いた位置に残っていたのは、FKを蹴った優衣と、寺田なえの二人。攻撃を遅らせる対応は、なえの役割であるが、少し離れたところにいる矢田美津子のことも見えていたため、牛尾望への対応が遅れてしまった。

当然といえば当然だが、まさかFKからあんなに一瞬にして相手ボールになるなどとは思ってもいなかったからだ。

牛尾望は、前に遮る物のない広大なピッチをぐんぐんと進んでいく。小柄なFWによく見られるが、彼女も俊足が売りの選手である。

ドリブルをしているというのに、まるで全力疾走しているかのように見える。それだけ、元の足が速いのだ。

そしてついにペナルティエリアに侵入、いや、その寸前、あと半歩というところで、牛尾望はバランスを崩して、転倒した。

全力で追い上げた寺田なえが、彼女のユニフォームを思い切り引っ張って倒したのだ。

笛の音。

なえに、イエローカードが出された。

無論、それを覚悟で止めたのだ。

次節、出場停止だ。

「ゆい」

寺田なえは、牛尾望を引っ張り起こしてやると、次いで恨めしそうな視線を優衣へと向けた。

「ごめん」

そもそもおれにFKなんか蹴らせるなっつーの。優衣はそう思ったが、とりあえず笑顔で両手を合わせて、ちょっと女の子らしい仕草で謝ってみたりなんかした。自分でやってて鳥肌立った。

いまのファールにより、パッション熊本は絶好の位置でFKを得た。

先ほど熊本ゴール前にいた両チームのFPたちが、まるまる全員ベイスパロウゴール前へと向かって行く。

「もう緊張病出ちゃったか？」

野本茜が通り過ぎざま、熱でも見るかのように優衣のおでこに自分のおでこを当ててきた。

「なんだよそれ？」

緊張なんかしてたまるかっつーの。

熊本のキッカーは、永瀬奈々。

ゴール前には、両チームの選手がごちゃごちゃとひしめき合っている。

ドン　ドン　ドン

と、両サポーターの太鼓の音。

ペナルティラインぎりぎり、ゴールに近過ぎるため、蹴る側として難しい面もあるのだが、守る側としてもまた難しい距離である。壁が近いのでそれを避けるために打ち上げてしまうことが多い。りがちな距離であるが、良い場所へすっと落とせさえすれば、高確率でゴールを狙えるだろう。

笛が鳴った。

白いユニフォーム、永瀬奈々は三歩ほどの短い助走で、ボールを蹴り上げた。

おそらく蹴る側としては完璧な、狙い通りのボールを、彼女は蹴った。

綺麗な軌跡を描き、選手たちの頭上をすっと飛び越えたボールは、ぶれながらすっと落ちたのだ。しかもGKから最も遠い隅に。

それが得点という結果に結びつかなかったのは、ひとえにGK堂島秀美の経験の賜物であった。

わざとコースを空けて誘っていたのだ。

そして、鋭い横っ跳びを見せ、片腕一本で弾いていた。

秀美の弾いたボールをねじ込もうと、郷田ほたるが素早く走り寄ったが、辻内秋菜が、間一髪のところまで蹴り出し、CKに逃れた。

GKのファインプレーに場内から拍手が起きた。

秀美は立ち上がると、額の汗を袖で拭った。

いまのは、本当に危なかった。

思いのほか速度のあるボールで、弾道は読み通りであったものの、とてもキャッチなど出来るものではなかった。それどころか、動き出しを一瞬でも躊躇っていたら決められてしまっていたかも知れない。多少バクチ気味に、蹴られた瞬間に動きだしたからよかったが、熊本のCK、これを蹴るのも永瀬奈々だ。

ショートコーナーを使った。近くにいる外間恵理へ渡した。

外間恵理はゴール前へと蹴り込む素振りを見せつつ、ファーでフリーになっていた矢田美津子へとグラウンダーの速いパスを送った。

読んでいた優衣が飛び出してパスカットを見せ、熊本の波状攻撃に繋がりそうな芽を摘んだ。前方中央で待っている寺田なえを目掛けて、強くボールを送ると、カウンターチャンスに自身も全力で上がり始めた。

その時である。優衣は、胸に痛みを感じた。

正確には、痛みをいま認識したというべきだろうか。いつからそうだったのかは、分からない。

刺すような痛みではない。もっと鈍い感じのものだ。

そして、血管という血管が詰まってしまったかのような、全身を襲う不快感。

これも、もしかしたら、いま気付いただけかも知れない。

自分自身の鼓動が聞こえそうなくらいに、心臓が、激しく、大きく動いていた。

それに合わせるように、どるっ、どるっ、と血管を粘液質な物体が押し出されていくような感覚。血液が、なんだかペースト状の物にでもなっているような。

あれ……

全力で、走っているはずなのに、その、つもりなのに、後ろから後ろから、どンドン、抜かされていく。

おかしいな、なんだよこれ。

おい、ちゃんと走れよ。

ほんと遅えな、この身体は。真面目にやれ、てめえ。

などと心の中で自分自身に文句をいっていると、突然、心臓をわしづかみされるような激痛に襲われた。

低く、短く、そして鋭い悲鳴を上げた。

ふっ、とぼやける意識の中、一瞬にして視界が反転。

優衣は、前へよろけるように、ピッチ上に倒れ込んでしまった。

「ちよつと、優衣！」

寺田なえの叫び声が響いた。

気が付いた主審が笛を吹き、プレーを中断させた。

担架が要請された。

優衣の身体は運営スタッフたちに担ぎ上げられ、乗せられて、屋根のあるベンチの方へと運ばれた。

「おそらくは、軽い熱中症でしょうねえ」

石巻ベイスパロウのチームドクターである藪崎真司が、監督らにそう説明している。

「お前、ちゃんと水分補給してたのか。このクソ暑い中」

監督は、意識半分の優衣へと顔を向けた。

担架に横たわったまま、優衣は首を横に振った。

「だって喉、かわいて、なかったし」

「それがそもそも熱中症の症状なんだよ」

前半三十三分。石巻ベイスパロウ、選手交替。

篠原優衣に変わり、沼尾妙子が入ることになった。

妙子は野本茜とのダブルボランチとして入り、これまで優衣のいた右SHのポジションには、ボランチ先発だった寺田なえが上がった。

ベイスパロウは、想定外の負傷退場により、前半のうちに交替力ードを一枚切ることになってしまった。

試合再開。

こうして優衣は、残りの時間をピッチの外から見ることになった。担架から下ろされ、現在はベンチを一つ使って横になっている。額には冷やしたタオルを乗せられている。

試合中に倒れたのだから、本来は奥で診断を受けるべきなのだが、優衣はそれを断った。今日はどうせ出られないのだから、涼しくしていればこれ以上悪くなることもないだろうし、とにかくこの試合を、石巻ベイスパロウのプレーを、目にしっかりと焼き付けておきたいと思ったのだ。

すっかり焼き付けるも何も、まだ夢半分現半分の状態ではあったが。

「どうも、すみませんね、くまちゃん」

うつろな表情で、試合の行方を見ている優衣。元氣のない声で、チームに迷惑をかけてしまったことを笹本監督に素直に謝った。

「気にすんな。使ったおれがバカだったただけだ」

笹本がどういう気持ちでそういつているのかは分からないが、いずれにしても優衣には、黙ってその言葉を受け入れるしかなかった。相当に、歯痒い思いであつたことだろう。プランを崩されたこと。勝負に対して熱い思いを持てばこそ。

笹本義夫、元Ｊリーガーである。しかし、大卒で入団したその初年度に、膝に大怪我を負い、引退。半年にもならないプロ選手生活を終えた。

もう二十年近く前のことだ。

それからそのクラブで雑務の仕事を行いながら、監督になるためにＳ級コーチの資格を取った。

Ｊリーグのクラブを始め、ＪＦＬ、社会人リーグ、男子のチームからは、どこからも監督としてのオファーはなかった。元同期の選手、現在某Ｊ２チーム監督の推薦により四年前に、この石巻ベイスパロウにコーチとして就任、そしてその翌年、同チームの監督になった。

最初は女子サッカーを軽視しており、それ故に憂鬱な気分にもなったし、選手たちに嫌な態度を見せてしまうこともあつた笹本であつたが、彼女らの一生懸命さに心打たれ、また、男子と遜色ない技術も持つ者もいることを知り、現在ではそのような気持ちは微塵も持っていない。とはいえ、相手チームや審判に対しては、相変わらずな発言をしてしまうのだが。

とにかく彼は、自分が走ることが出来ない分だけ、自分が試合することが出来ない分だけ、自分の分身ともいえるピッチ上の選手や試合に対しての思いは強い。

優衣は、笹本の内面などは知らないが、これまでの経歴を見れば、どれだけの気持ちを持ってこの仕事に携わっているかなど分かる。

だから、ただ勢いに任せたプレーで迷惑をかけてしまったことは、

本当に申し訳ないと思っていた。

先ほどまで視界がぐるぐる回り、すべてが霞んだように見えていたのだが、それは知らず知らずのうちに回復してきていた。気が付かなかったのは、湿気を帯びた地面が凄まじい高温に熱つせられて、空気がかげろうのようにゆらゆらと揺れていたからだ。

しかし、なんて暑さだよな、これは。それなのに、あんなに走り回っていて、こいつら、凄えな。

優衣は、この試合環境のあまりの過酷さに、なんともいいようのない、しかし強い衝撃を受けていた。素直に、感嘆していた。

プロじゃないくせに。

一銭にもならないってのに。

好きだから、やってんだろっな。

サッカーをさ。

なんだか、懐かしいな。

こういうの。

ズンダマーレ宮城が、まだJFLにすら所属していなかった頃、地域リーグ時代、自分も、平日は昼はアルバイト、夜は薄暗い照明の下で練習。休日も練習か、試合。

あまりにプライベートな時間がとれなさすぎて、彼女に愛想つかされて振られたりしたっけ。

試合は基本まっ昼間。今日みたいな異常な暑さの中も、雪のちらつく極寒の中もお構いなし。とにかく安い運営費で試合を、という主催クラブに合わせるしかなかった。

それが、当たり前だった。

好きで、自分で選んだ道。

他にも進む道はあったのに、その道を、自分は選んだ。

サッカーをやることが、ただ好きだったから、とにかくがむしやらに頑張っていた。

未来を信じるとか信じないとか、そんなことはどうでもよくて、ただ、現在を生きていた。

時として、自分への疑問を持つこともあったけど、飯を食い空気を吸うがごとく自然に、気がつけばサッカーのために他の全てを捨てて生きていた。

優衣は、松島裕司としての過去を振り返りながら、ぼーっとした視線で目の前の試合を見ている。視線は定まらないが、もう意識そのものは完全に回復し、はつきりとしていた。気持ち悪くて吐きそうではあったが。

汗を飛ばし、走り、叫び、懸命にボールを追う両チームの選手たちの姿。

おんなじなんだな。

こいつら。

あの頃の、おれと。

金も貰えやしないのに、なんでそんな思いをしてまで。って、先日、茜ちゃんに聞いたりしたけど、そんなの、聞くまでもないことだったな。

だってさ、おれだってさっき、試合前、あんなにすっげえわくわくする気分、味わったじゃないか。ただ試合をやれるという、それだけのことで。

こいつら、すっげえいきいきと、輝いてるんだな。

じゃあさ……

……ということはさ、

おれも、輝いていたんだ。

アルバイトとサッカーだけの、ぎすぎすと、きらきらとしていた頃、自分は何なのだろうと自問することが何度もあった。

いま目の前のピッチにて流されている彼女らの汗が、叫びが、そうしたこれまでの人生を拍子抜けするほどにあっけらかんと肯定してくれたような気がして、ちょっぴり嬉しくなった。

でもそう思うということは、「リーガー」になってからのおれは、輝いていなかった？

いや、そんなことはないはず。それじゃああまりに虚しい。

そんなことに優越などつけてみても意味がない。優衣は吐き気をこらえ、目の前の試合に集中した。

その矢先である。

前半四十二分、石巻ベースパロウは失点した。

どちらが二部上がりだか分からないほどに、素早いパス回しにそれはもう見事なまでに翻弄され、崩されて。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8041x/>

優衣

2011年11月18日17時38分発行